

夕書一〇・一三
 一母後一・二七
 ソ母前三一・九 米一
 一〇・士一六・二三
 一八・六
 一五・二〇
 士 一母前三一・四
 一・三四 母前 一母前三一・一
 一四・二三 伯三・
 一母前一八・四
 三、四 耶二〇・一四 井士一四・二八
 一母前一〇・一 一母前一八・一、三、
 一母後一・二九 七、八
 一八・二、二〇・一
 一母前二二・二、三、
 一母後一・二九 七、八
 一母前二二・二、三、
 一母後一・二九 七、八
 一母前二二・二、三、
 一母後一・二九 七、八

一四 他國の人すなはちアマレク人なりと 一四
 一五 ころすことを畏ざりしやと 一五
 一六 うちければ死り 一六
 一七 者をころせりといひて己にむかひて證をたつればなり 一七
 一八 悲歌をもてサウルと其子ヨナタンを吊ふ 一八
 一九 歌是なり是はヤシル書に記さる 一九
 二〇 事をガテに告るなかれアシケロンの邑に傳るなかれ恐くはペリシテ人の女等喜ばん恐くは割禮を受ざる者の女等 二〇
 二一 樂み祝はん 二一
 二二 干棄らるればなり即ちサウルの干膏を沃がずして彼處に棄らる 二二
 二三 かず勇士の脂を食ずしてサウルの劍は空く歸らず 二三
 二四 二人は驚よりも捷く獅子よりも強かりき 二四
 二五 を華麗に粧ひ金の飾を汝等の衣に着たり 二五
 二六 兄弟ヨナタンよ我汝のために悲慟む汝は大に我に樂き者なりき汝の我をいつくしめる愛は尋常ならず婦の愛 二六
 二七 にも勝りたり 二七
 一 此のちダビデ、エホバに問ていひけるは我ユダのひとつの邑にのぼるべきやエホバかれにいひた
 まひけるはのぼれダビデいひけるは何處にのぼるべきやエホバいひたまひけるはヘブロンにのぼる

第二章

一 此のちダビデ、エホバに問ていひけるは我ユダのひとつの邑にのぼるべきやエホバかれにいひた
 まひけるはのぼれダビデいひけるは何處にのぼるべきやエホバいひたまひけるはヘブロンにのぼる

ニ ベしと 二 ダビデすなはち彼處かしこにのほれりその二人ふたりの妻つまエズレル人びとアヒノアムおよびカルメル人びとナバルの妻つまなり
 三 シアビガルもともにのほれり 三 ダビデ其そのおのれとともにありし從者じふしやと其家族そのかぞをことごとく將ひさるのほりければ皆みな
 四 ヘブロンへぶろんの諸邑しよにすめり 四 時にユダいぶだの人々ひとらきたり彼處かしこにてダビデに膏あぶらをそよぎてユダの家いへの王わうとなせり
 五 人々ひとらダビデにつげてサウルを葬はうじりしはヤベシギレアデいへの人なりといひければ 五 ダビデ使者つかひをヤベシギレ
 アデの人ひとにおくりてこれにいひけるは汝なんぢらこの厚意あつきこころを汝なんぢらの主しゆサウルにあらはしてかれを葬はうじりたればねがはく
 六 は汝なんぢらエホバより福祉さいはひをえよ 六 ねがはくはエホバ恩寵めぐみと眞實まことを汝等なんぢらにしめしたまへ汝なんぢらこの事ことをなしたるによ
 七 り我亦われまた汝なんぢらに此恩惠このめぐみをしめすなり 七 されば汝なんぢら手てをつよくして勇ましくなれ汝なんぢらの主しゆサウルは死しにたり又ユダの
 家我いへわれに膏あぶらをそよぎて我われをかれらの王わうとなしたればなりと

八 爰ここにサウルさうるの軍ぐんの長かしらネルの子こアブネル、サウルの子こイシボセテを取りてこれをマハナイムまはなにみちびきわた
 九 り 九 ギレアデとアシユリ人びととエズレルとエフライムとベニヤミンとイスラエルいすらえるの衆しゆの王わうとなせり 一〇 サウルの
 子こイシボセテはイスラエルいすらえるの王わうとなりし時とき四十歳よんじゆうさいにして二年にんねんのあひだ位くらゐにありしがユダの家いへはダビデにしたがへ
 二 り 二 ダビデのヘブロンへぶろんにありてユダの家いへの王わうたりし日數ひかずは七年ねんと六ヶ月むつきなりき 二
 三 三 ネルの子こアブネル及びサウルの子こなるイシボセテの臣僕等けらいたちマハナイムまはなを出いでてギベオンぎべおんに至いたれり 三 セルヤ
 四 の子こヨアブとダビデの臣僕けらいもいでゆけり彼らかれギベオンぎべおんの池いけの傍かたはらにて出會いであひいつはう一方いっほうは池いけの此畔このたに一方いっほうは池いけの彼畔かたに坐ます
 一四 アブネル、ヨアブにいひけるはいざ少者わかものをして起たちて我われらのまへに戯たはむれしめんヨアブいひけるは起たしめんと
 一五 サウルの子こイシボセテに屬ぞくするベニヤミンべにやみんの人其數ひとそのかず十二人じふににん及びダビデの臣僕けらい十二人じふににん起たちて前まへみ 一六 おのおの其その

イ母前三〇・五
 口母前二七・二、三、ハ母後二・二、五、五、ホ得二・二〇、三、一、ト母前四・五〇
 三〇・一 代上二二ニ母前三一・二、一、一、〇 詩一五・一五、一五、チ代上八・三三、九、二二
 へ提後一・一六、一八、三九、又書一八・二五
 リ母後五・五、王上二、ル耶四・二二

ヲ代上二・二六
カ詩一八・三三 歌二
ヨ士一四・一九
タ母後三・二七、四
レ母後二・一四 鐵
一七・一四

敵手の首を執へて劍を其敵手の脅に刺し斯して彼等俱に斃れたり是故に其處はヘルカテハヅリム(利劍の地)と稱

らる即ちギベオンにあり 此日戰甚だ烈しくしてアブネルとイスラエルの人々ダビデの臣僕のままへに敗る

其處にゼルヤの三人の子ヨアブ、アビシヤイ、アサヘル居たりしがアサヘルは疾足なること野にをる驢の

ごとくなりき アサヘル、アブネルの後を追ひけるが行に右左にまがらずアブネルの後をしたふ アブネル

後を顧みていふ汝はアサヘルなるか彼しかりと答ふ アブネルかれにいひけるは汝の右か左に轉向て少者の

一人を擒へて其戎服を取れと然どアサヘル、アブネルをおふことを罷て外に向ふを肯ぜず アブネルふたしび

アサヘルにいふ汝我を追ことをやめて外に向へ我なんぞ汝を地に撃ち仆すべけんや然せば我いかでかわが面を汝

の兄ヨアブにむくべけんと 然どもかれ外にむかふことをいなむによりアブネル槍の後銛をもてかれの腹を刺

しければ槍その背後にいでたりかれ其處にたふれて立時に死り斯しかばアサヘルの仆れて死るところに來る者は

皆たちどまれり

されどヨアブとアビシヤイはアブネルの後を追きたりしがギベオンの野の道傍にギアの前にあるアンマの

山にいたれる時日暮ぬ ベニヤミンの子孫アブネルにしたがひて集まり一隊となりてひとつの山の頂にたてり

爰にアブネル、ヨアブをよびていひけるは刀劍豈永久にほろぼさんや汝其終りには怨恨を結ぶにいたるを

しらざるや汝何時まで民に其兄弟を追ふことをやめてかへることを命ぜざるや ヨアブいひけるは神は活く

若し汝が言出さざりしならば民はおのおの其兄弟を追はずして今晨のうちにさりゆきしならんと かくてヨア

ブ喇叭を吹きければ民皆たちどまりて再イスラエルの後を追はずまたかさねて戰はざりき アブネルと其從者

サムエル後書 二・一七—二九 五六七

終夜アラバを経ゆきてヨルダンを濟りビテロンを通りてマハナイムに至れり

ヨアブ、アブネルを追ことをやめて歸り民をことごとく集めたるにダビデの臣僕十九人とアサヘル缺て

をらざりき されどダビデの臣僕はベニヤミンとアブネルの從者三百六十人を撃ち殺せり 人々アサヘルを

取りあげてベテレヘムにある其父の墓に葬るヨアブと其從者は終夜ゆきて黎明にヘブロンにいたれり

第三章

くなれり

ヘブロンにてダビデに男子等生る其首出の子はアムノンといひてエズレル人アヒノアムより生る 其次

はギレアブといひてカルメル人ナバルの妻なりしアビガルより生る第三はアブサロムといひてゲシユルの王タル

マイの女子マアカの子なり 第四はアドニヤといひてハギテの子なり第五はシバテヤといひてアビタルの子

なり 第六はイテレヤムといひてダビデの妻エグラの子なり是等の子へブロンにてダビデに生る

サウルの家とダビデの家の間に戦争ありし間アブネルは堅くサウルの家に荷擔り 嚮にサウル一人の妾

を有り其名をリヅバといふアヤの女なり爰にイシボセテ、アブネルにいひけるは汝何ぞわが父の妾に通じたるや

アブネル甚しくイシボセテの言を怒りていひけるは我今日汝の父サウルの家とその兄弟とその朋友に厚意を

あらはし汝をダビデの手にわたさざるに汝今日婦人の過を擧て我を責む我あに犬の首ならんやユダにくみする者

ならんや 神アブネルに斯なしましたかさねて斯なしたまへエホバのダビデに誓ひたまひしごとく我かれに然な

すべし 即ち國をサウルの家より移しダビデの位をダンよりベエルシバにいたるまでイスラエルとユダの上に

イ代上三・二一—四 二母前二七・八 母後 へ母後二一・八、一〇 二四・二四 母後九 一九・二二 二七 代上一二・ 一七・二一 王上四
口母前二五・四三 一三・三七 下母後一六・二二 八、一六・九 又母前一五・二八、 二三 二五
ハ代上三・一 ホ王上一・五 王上二二・一八 母前 得一・一七 王上 一六・二、二二、二八、 三三、三〇・一 母後

ヲ母前一八・二〇 七
ワ判四三・三
カ母前一八・二五、二 夕母後一九・一六
レ母前三・九
ソ代上一二・二九
ツ母後三・一〇、一二
*王上一・三七

二 たてん 一 イシボセテ、アブネルを恐れられたればかさねて一言も之にこたふるをえざりき

三 アブネルおのれの代に使者をダビデにつかはしていひけるは此地は誰の所有なるや又いひけるは汝我と
二 契約を爲せ我力を汝に添へてイスラエルを悉く汝に歸せしめん 三 ダビデいひけるは善し我汝と契約をなさん
三 但し我一の事を汝に索む即ち汝來りてわが面を覲る時先づサウルの女ミカルを携きたらざれば我面を覲るを得
二 じと 一四 ダビデ使者をサウルの子イシボセテに遣していひけるはわがペリシテ人の陽皮一百を以て聘たるわが妻
一四 一四 ミカルを我に交すべし 一五 イシボセテ人をつかはしてかれを其夫ライシの子バルテより取しかば 一六 其夫哭つゝ
一六 歩みて其後にしたがひて俱にバホルムにいたりしがアブネルかれに歸り往けといひければすなはち歸りぬ

一七 アブネル、イスラエルの長老等と語りていひけるは汝ら前よりダビデを汝らの王となさんことを求め居た
一八 一八 り 一八 されば今これをなすべし其はエホバ、ダビデに付て語りて我わが僕ダビデの手を以てわが民イスラエルを
一八 一八 ペリシテ人の手よりまたその諸の敵の手より救ひいださんといひたまひたればなりと 一九 アブネル亦ベニヤミン
一九 一九 の耳に語りしかしてアブネル自らイスラエルおよびベニヤミンの全家の善とおもふ所をヘブロンにてダビデの
一九 一九 耳に告んとて往り 二〇 すなはちアブネル二十人をしたがへてヘブロンにゆきてダビデの許にいたりければダビデ、
二〇 二〇 アブネルと其したがへる從者のために酒宴を設けたり 二二 アブネル、ダビデにいひけるは我起てゆきイスラエル
二二 二二 をことごとくわが主王の所に集めて彼等に汝と契約を立しめ汝をして心の望む所の者をことごとく治むるにいた
二二 二二 らしめんと是においてダビデ、アブネルを歸してかれ安然に去り

三三 時にダビデの臣僕およびヨアブ人の國を侵して歸り大なる掠取物を携へきたれり然どアブネルはダビデと
三三 三三 サムエル後書 三・一一―一二 五六九

三三 ともにヘブロンにはをらざりき其はダビデかれを歸してかれ安然に去りたればなり 三三 ヨアブおよびともにありし軍兵皆かへりきたりしとき人々ヨアブに告ていひけるはネルの子アブネル王の所にきたりしが王かれを返して
 二四 かれ安然にされりと ヨアブ王に詣りていひけるは汝何を爲したるやアブネル汝の所にきたりしに汝何故に
 二五 かれを返して去ゆかしめしや 汝ネルの子アブネルが汝を誑かさんとてきたり汝の出入を知りまた汝のすべて
 二六 爲す所を知んために来りしを知ると かくてヨアブ、ダビデの所より出来り使者をつかはしてアブネルを追し
 二七 めたれば使者シラの井よりかれを將返れりされどダビデは知ざりき
 二七 アブネル、ヘブロンに返りしかばヨアブ彼と密に語らんとてかれを門の内に引きゆき其處にてその腹を刺
 二八 てこれを殺し己の兄弟アサヘル血をむくいたり 其後ダビデ聞いていひけるは我と我國はネルの子アブネルの
 二九 血につきてエホバのまへに永く罪あることなし 其罪はヨアブの首と其父の全家に歸せよねがはくはヨアブの
 三〇 家には白濁を疾ものか癩病人か杖に倚ものか劍に仆るものか食物に乏しき者か絶ゆることあらざれと ヨアブ
 とその弟アビシヤイのアブネルを殺したるは彼がギベオンにて戰陣のうちにおのれの兄弟アサヘルをころせし
 により
 三二 ダビデ、ヨアブおよびおのれとともにある民にいひけるは汝らの衣服を裂き麻の衣を着てアブネルのため
 三三 に哀哭くべしとダビデ王其棺にしたがふ 人衆アブネルをヘブロンに葬れり王聲をあけてアブネルの墓に哭き
 三三 又民みな哭けり 王アブネルの爲に悲の歌を作りて云くアブネル如何にして愚なる人の如くに死けん 汝の
 三四 手は縛もあらず汝の足は鏈にも繋れざりしものを嗚呼汝は悪人のために仆る人のごとくにたふれたり斯て民皆

イ 得前二九・六 賽 二〇・九、一〇
 三三・二二八 八 得後四・六
 口 王上二・五 母後 二 得後二・二三 三
 ホ 王上二・三三、三三 三 書七・六 得後一・又 母後一三・二二、一
 へ 利一五・二 二、二
 ト 得後二・二三 三 創三七・三四

ル 母後二二・二七 耶 一六・七
 上二・五・六・三三、
 三四 詩二八・四、
 六二・一二 提後四
 一四
 一母後一九・一七
 二母後一九・一三 王
 三母後一九・一三 王
 六二・一二 提後四
 一四
 一母後一九・一三 王
 六二・一二 提後四
 一四
 一母後一九・一三 王
 六二・一二 提後四
 一四

再びかれのために哭けり 民みな日のあるうちにダビデにパンを食はしめんとて來りしにダビデ誓ひていひけるは若し日の没まへに我バンにても何にても味ひなば神我にかくなし又重ねて斯なしたまへと 民皆見て之を其目に善しとせり凡て王の爲すところの事は皆民の目に善と見えたり 其日民すなはちイスラエル皆ネルの子アブネルを殺たるは王の所爲にあらざるを知れり 王その臣僕にいひけるは今日一人の大將大人イスラエルに斃る汝らこれをしらざるや 我は膏そゝがれし王なれども今日尙弱しゼルヤの子等なる此等の人我には制しがたしエホバ惡をおこなふ者に其惡に隨ひて報いたまはん

第四章

一 サウルの子はアブネルのヘブロンにて死たるを聞きしかば其手弱くなりてイスラエルみな憂へたり 二 サウルの子隊長二人を有てり其一人をバアナといひ一人をレカブといふベニヤミンの支派なるベロテ人リンモンの子等なり其はベロテも亦ベニヤミンの中に數らるればなり 昔にベロテ人ギツタイムに逃遁れて今日にいたるまで彼處に旅人となりて止まる

四 サウルの子ヨナタンに跛足の子一人ありエズレルよりサウルとヨナタンの事の報いたりし時には五歳なり 五 き其乳媪かれを抱きて逃れたりしが急ぎ逃る時其子墜て跛者となれり其名をメビボセテといふ

六 ベロテ人リンモンの子レカブとバアナゆきて日の熱き頃イシボセテの家（ラ）にいたるにイシボセテ午睡し居たり 七 彼等が家にいりしときイシボセテは其寢室（ヤ）にありて床の上に寝たりかれら即ちこれを蹴りて

八 其首級をとり終夜アラバの道をゆきて イシボセテの首級をヘブロンにダビデの許に携へいたりて王にいひけ

るは汝の生命を求めたる汝の敵サウルの子イシボセテの首を視よエホバ今日我主なる王の仇をサウルと其裔に報いたまへりと
 九 ダビデ、ベロテ人リンモンの子レカブと其兄弟バアナに答へていひけるはわが生命を諸の艱難の中に救ひたまひしエホバは生く
 一〇 我は嘗て人の我に告て視よサウルは死りと言ひて自ら我に善き事を傳ふる者と思ひをりしを執てこれをチクラグに殺し其消息に報いたり
 一一 況や悪人の義人を其家の床の上に殺したるをやされば我彼の血をながせる罪を汝らに報い汝らをこの地より絶ざるべけんやと
 一二 ダビデ少者に命じければ少者かれらを殺して其手足を切離しへブロン池の上に懸たり又イシボセテの首を取りてへブロンにあるアブネルの墓に葬れり

第五章

一 爰にイスラエルの支派咸くへブロンにきたりダビデにいたりていひけるは視よ我儕は汝の骨肉なり
 二 前にサウルが我儕の王たりし時にも汝はイスラエルを率ゐて出入する者なりきしかしてエホバ汝に汝わが民イスラエルを牧養はん汝イスラエルの君長とならんといひたまへりと
 三 斯くイスラエルの長老皆へブロンにきたり王に詣りければダビデ王へブロンにてエホバのまへにかれらと契約をたてたり彼らすなはちダビデに膏を灑でイスラエルの王となす
 四 ダビデは王となりし時三十歳にして四十年の間位に在き即ちへブロンにてユダを治むること七年と六箇月またエルサレムにてイスラエルとユダを全く治むること三十年なり

六 茲に王其従者とともにエルサレムに往き其地の居民エブス人を攻んとすエブス人ダビデに語りていひけるは汝此に入ること能はざるべし反て盲者跛者汝を追はらはんと是彼らダビデ此に入るあたはずと思へるなり

イ母前一九・二一〇、口創四八・一六 王上 二創九・五、六
 一・二、二二・一五、一・二九詩三一・七 ホ母後一・一五
 二五・二九 ハ母後一・二、四、一五 ハ母後三・三二
 ト代上一・二、二、二二
 リ母前一八・一三 七・七
 又母前一六・一、二二 代上一・三三
 詩七八・七一 母後 王下二一・二七
 カ代上二六・三一、
 二九・二七
 三・四
 三・四

タ士一・二一
 レ書一五・六三 士一 二 母後五・九 王上二 二 代上 一四・一
 八、一九・二一 二〇、八・一 三・九、一四・三 井代上三・六
 ヲ代上三・五、一四・四 ノ代上一四・七 才代上一一・二六、一 一 母後二二・一四 一 母前二二・二、四、
 マ 三〇・八 母後二・一
 ケ 二八・二一

然るにダビデ、シオンの要害を取り是即ちダビデの城邑なり 八
 ダビデ其日いひけるは誰にても水道にいたり

てエブス人を撃ちまたダビデの心の悪める跛者と盲者を撃つ者は(首となし長となさん)と是によりて人々盲者と

跛者は家に入るべからずといひなせり 九
 ダビデ其要害に住て之をダビデの城邑と名けたりまたダビデ、ミロ

(城塞)より内の四方に建築をなせり 一〇
 かくてダビデはますます大に成りゆき且萬軍の神エホバこれと共にいま

せり 二
 ツロの王ヒラム使者をダビデに遣はして香柏および木匠と石工をおくれり彼らダビデの爲に家を建つ

三
 ダビデ、エホバのかたく己をたてしイスラエルの王となしたまへるを曉りまたエホバの其民イスラエルの

ために其國を興したまひしを曉れり 一三
 ダビデ、ヘブロンより來りし後エルサレムの中よりまた妾と妻を納たれば男子女子またダビデに生る

一四
 エルサレムにて彼に生れたる者の名はかくのごとしシヤンマ、シヨバブ、ナタン、ソロモン 一五
 イブハル、

一六
 エリシユア、ネベグ、ヤビア 一六
 エリシヤマ、エリアダ、エリバレテ

一七
 爰に膏を沃いでダビデをイスラエルの王と爲し事ペリシテ人に聞えければペリシテ人皆ダビデを獲んとて

一八
 上るダビデ聞て要害に下れり 一八
 ペリシテ人臻りてレバインの谷に布き備たり 一九
 ダビデ、エホバに問ていひ

けるは我ペリシテ人にむかひて上るべきや汝かれらをわが手に付したまふやエホバ、ダビデにいひたまひけるは

上れ我必らずペリシテ人を汝の手にわたさん 二〇
 ダビデ、バアルペラジムに至りかれらを其所に撃ていひけるは

エホバ水の破壊り出るとく我敵をわが前に破壊りたまへりと是故に其所の名をバアルペラジム(破壊の處)と

代上二五・二五 出二五・二〇 詩 代上一五・二九 六三 士九・四 母前二五・三五 賽
 ナ民四・二五 賽三・三 三〇・一一 才代上一六・一 王上八・五五 代上 母後六・二四・一六 二二・一四 太一・
 代上一五・二一 一五 ウ母前二・二八 代上 才代上一五・一 詩 一六・二 母前一九・二四 二五
 王上八・五 代上 一五・二七 一三二・八 才代上一六・三 母前一三・一四、一 才代上一七・一
 一五・二六 井代上一五・二八 ヤ王上八・五・六二、フ詩三〇・ 五・二八

二二 エホバ神の櫃のためにオベデエドムの家と其所有を皆恵みたまふといふ事ダビデ王に聞えければダビデ

一三 ゆきて喜樂をもて神の櫃をオベデエドムの家よりダビデの城邑に昇上れり エホバの櫃を昇者六歩行たる時

一四 ダビデ牛と肥たる者を献げたり ダビデ力を極めてエホバの前に踊躍れり時にダビデ布のエホバを着け居たり

一五 ダビデおよびイスラエルの全家歡呼と喇叭の聲をもてエホバの櫃を昇のほれり

一六 神の櫃ダビデの城邑にいりし時サウルの女ミカル意より窺ひてダビデ王のエホバのまへに舞躍るを見其心

一七 にダビデを藐視む 人々エホバの櫃を昇入てこれをダビデが其爲に張たる天幕の中なる其所に置りしかして

一八 ダビデ燔祭と酬恩祭をエホバのまへに献げたり ダビデ燔祭と酬恩祭を獻ぐることを終し時萬軍のエホバの名

一九 を以て民を祝せり また民の中即ちイスラエルの衆庶の中に男にも女にも俱にパン一箇肉一斤乾葡萄一塊

を分ちあたへたり斯て民皆おのおの其家にかへりぬ

二〇 爰にダビデ其家族を祝せんとて歸りしかばサウルの女ミカル、ダビデをいでむかへていひけるはイスラエ

ルの王今日如何に威光ありしや自ら遊蕩者の其身を露すがごとく今日其臣僕の婢女のまへに其身を露したまへ

二一 りと ダビデ、ミカルにいふ我はエホバのまへに即ち汝の父よりもまたその全家よりも我を選みて我をエホバ

二二 の民イスラエルの首長に命じたまへるエホバのまへに躍れり 我は此よりも尙鄙からんまたみづから賤しと思

二三 はん汝が語る婢女等とともにありて我は尊榮をえんと 是故にサウルの女ミカルは死ぬる日まで子あらざりき

第七章 王其家に住にいたり且エホバ其四方の敵を壊てかれを安らかならしめたまひし時 王預言者ナ

三 タンに云けるは視よ我は香柏の家に住む然ども神の櫃は幔幕の中にあり

四 在せば往て凡て汝の心にあるところを爲せ 其夜エホバの言ナタンに臨みていはく 往てわが僕ダビデに言

六 へエホバ斯く言ふ汝わがために我の住むべき家を建んとするや 我はイスラエルの子孫をエジプトより導き出

七 せし時より今日にいたるまで家に住しことなくして但天幕と幕屋の中に歩み居たり 我イスラエルの子孫と共

八 の士師の一人に一言も語りしことあるや 然ば汝わが僕ダビデに斯く言ふべし萬軍のエホバ斯く言ふ我汝を

九 牧場より取り羊に隨ふ所より取りてわが民イスラエルの首長となし 汝がすべて往くところにて汝と共にあり

一〇 汝の諸の敵を汝の前より斷さりて地の上の大なる者の名のごとく汝に大なる名を得さしめたり 又我わが民

二 イスラエルのために處を定めてかれらを植つけかれらをして自己の處に住て重て動くことなからしめたり

三 た悪人昔のごとくまたわが民イスラエルの上に士師を立てたる時よりの如くふたゝび之を惱ますことなかるべ

四 し我汝の諸の敵をやぶりて汝を安かならしめたり又エホバ汝に告ぐエホバ汝のために家をたてん 汝の日の満

五 て汝が汝の父祖等と共に寢らん時に我汝の身より出る汝の種子を汝の後にたてゝ其國を堅うせん 彼わが名の

六 ために家を建ん我永く其國の位を堅うせん 我はかれの父となり彼はわが子となるべし彼もし迷はば我人の

七 杖と人の子の鞭を以て之を懲さん されど我の恩恵はわが汝のまへより除きしサウルより離れたることくに彼

八 よりは離るゝことあらじ 汝の家と汝の國は汝のまへに永く保つべし汝の位は永く堅うせらるべし ナタン

イ母後五・一一 口徒七・四六 八出二六・一、四〇 二一 二王上八・一七、一八 代上三二・七、二八

ホ王上五・三、八・一 九 代上三二・八、二八・三 二二 王上八・一六 下出四〇・一八、一九、

三三 又代上一七・六 三三 又代上一七・六 三三 又代上一七・六 三三 又代上一七・六 三三 又代上一七・六

ワ母前三一・六 詩 夕詩八九・二二 一 二七 王上一・一 王上八・二〇 詩 一三二・一一 一三三・一一

八九・四、二九、
三六・三七
井詩八九・二六、二七
來一・五
ノ詩八九・三〇、三一、ク母後七・一三、詩マ母後七・一二、一三
三三・三三
オ母前一五・二三、二
八一・一六、一四、五
上二一・一三、三四
ヤ二一・一〇
マ母後七・一二、一三
下二・五、詩四八・
エ申三・二四、四・三五、テ申四・七、三二、
サ申二六・一八
八三六・三七約
一三・三四
一三九・一
代上一六・二五
詩四八・
エ申三・二四、四・三五、
テ申四・七、三二、
サ申二六・一八
ケ寮五五・八
フ創一八・一九、詩
一三九・一
下二・五、詩四八・
エ申三・二四、四・三五、
テ申四・七、三二、
サ申二六・一八
一、八六・一〇、九
六・四、一三五・五、
一四五・三、耶一〇
六、
エ申三・二四、四・三五、
テ申四・七、三二、
サ申二六・一八
三三・三九、母前二
三、一四七・二〇
詩一四七・二〇
二、八八・一八、
八九・六、八、
八、
一、
メ約一七・一七
マ母後三三・五一
三四・三三・二九
キ詩四八・一四
エ得四・四、母前九、
一五

凡て是等の言のごとくまたすべてこの異象のごとくダビデに語りければ

一八 ダビデ王入りてエホバの前に坐していひけるは主エホバよ我は誰わが家は何なればか爾此まで我を導き

一九 たまひしや 主エホバよ此はなほ汝の目には小き事なり汝また僕の家の遙か後の事を語りたまへり主エホバよ

二〇 是は人の法なり ダビデ此上何を汝に言ふを得ん其は主エホバ汝僕を知らたまへばなり 汝の言のためまた

二三 汝の心に隨ひて汝此諸の大なることを爲し僕に之をしらしめたまふ 故に神エホバよ爾は大なり其は我らが

二三 凡て耳に聞る所に依ば汝の如き者なくまた汝の外に神なければなり 地の何れの國か汝の民イスラエルの如く

二四 なる其は神ゆきてかれらを贖ひ己の民となして大なる名を得たまひまた彼らの爲に大なる畏るべき事を爲したま

二四 へばなり即ち汝がエジプトより贖ひ取たまひし民の前より國々の人と其諸神を逐拂ひたまへり 汝は汝の民イ

二五 スラエルをかぎりなく汝の民として汝に定めたまへりエホバよ汝はかれの神となりたまふ されば神エホバよ

二六 汝が僕と其家につきて語りたまひし言を永く堅うして汝のいひしごとく爲たまへ ねがはくは永久に汝の名を

崇めて萬軍のエホバはイスラエルの神なりと曰しめたまへねがはくは僕ダビデの家をして汝のまへに堅く立しめ

二七 たまへ 其は萬軍のエホバ、イスラエルの神よ汝僕 の耳に示して我汝に家をたてんと言たまひたればなり

二八 是故に僕此祈禱を汝に爲す道を心の中に得たり 主エホバよ汝は神なり汝の言は眞なり汝この恵を僕に語り

二九 たまへり 願くは僕の家を祝福して汝のまへに永く續くことを得さしめたまへ其は主エホバ汝これを語りたまへ

ばなりねがはくは汝の祝福によりて僕の家に永く祝福を蒙らしめたまへ

第八章

一 此後ダビデ、ペリシテ人を撃てこれを服すダビデまたペリシテ人の手よりメテグアンマをとれり
二 此後ダビデ、ペリシテ人を撃ち彼らをして地に伏しめ繩をもてかれらを度れり即ち二條の繩をもて死す者を度り一條の繩をもて生しおく者を量度るモアブ人は貢物を納てダビデの臣僕となれり

三 ダビデまたレホブの子なるゾバの王ハダデゼルがユフラテ河の邊にて其勢を新にせんとして往るを撃り
四 しかしてダビデ彼より騎兵千七百人歩兵二萬人を取りまたダビデ一百の車の馬を存して其餘の車馬は皆其筋を

五 切斷り
六 ダマスコのスリア人ゾバの王ハダデゼルの援んとて來りければダビデ、スリア人二萬二千を殺せり
六 しかしてダビデ、ダマスコのスリアに代官を置きぬスリア人は貢物を納てダビデの臣僕となれりエホバ、ダビ

七 デを凡て其往く所にて助けたまへり
八 ダビデ、ハダデゼルの臣僕等の持る金の楯を奪ひてこれをエルサレムに携きたる
九 ダビデ王又ハダデゼルの邑ベタとベロタより甚だ多くの銅を取り

一〇 時にハマテの王トイ、ダビデがハダデゼルの總の軍を撃破りしを聞て
一〇 トイ其子ヨラムをダビデ王につかはし安否を問ひかつ視を宣しむ其はハダデゼル嘗てトイと戰を爲したるにダビデ、ハダデゼルとたゝかひて

二 これを撃やぶりたればなりヨラム銀の器と金の器と銅の器を携へ來りければ
二 ダビデ王其攻め伏せたる諸國民の中より取りて納めたる金銀と共に是等をもエホバに納めたり
三 即ちエドムよりモアブよりアンモンの子孫よりペリシテ人よりアマレクよりえたる物およびゾバの王レホブの子ハダデゼルより得たる掠取物とともにこれを納めたり

四 ダビデ鹽谷にてエドム人一萬八千を撃て歸て名譽を得たり
四 ダビデ、エドムに代官を置り即ちエドムの

イ代上一八・一 一〇・二七 六〇・
ロ民二四・一七 二母後八・六、一四 へ代上一八・三
ハ詩七三・一〇 是勳 母後一〇・六 詩 ト創一五・一八 又王上一・二二三、
チ代上一八・四 二四、二五 二六
リ書一一・六、九 二母後八・二 二六
又王上一・二二三、 二母後八・一四、七、九 三母後八・一四、七、九 三母後八・一四、七、九
ヲ王上一〇・一六 二六
カ代上一八・八 一八・二一、 二六、
ヨ代上一八・九 二六、
タ代上一八・一〇 二六
レ王上一七・五一 代上 二六
ソ王上一四・七 二六
ツ代上一八・二 二六

主人の子メビボセテは恒に我席において食ふべしとヂバは十五人の子と二十人の僕あり
総て王わが主の僕に命じたまひしごとく僕なすべしとメビボセテは王の子の一人のごとくダビデの席にて食へり

メビボセテに一人の若き子あり其名をミカといふヂバの家に住る者は皆メビボセテの僕なりき
メビボセテはエルサレムに住みたり其はかれ恒に王の席にて食ひたればなりかれは兩の足ともに跛たる者なり

第一〇章
此後アンモンの子孫の王死て其子ハヌン之に代りて位に即く
ダビデ我ナハシの子ハヌンに

其僕を遣せりダビデの僕アンモンの子孫の地にいたるに
アンモンの子孫の諸伯其主ハヌンにいひけるはダビデ慰者を汝に遣はしたるによりて彼汝の父を崇むと汝の目に見ゆるやダビデ此城邑を窺ひこれを探りて陥い

れんために其僕を汝に遣はせるにあらずや
是においてハヌン、ダビデの僕を執へ其鬚の半を剃り落し其衣服を中より斷て股までにしてこれを歸せり
人々これをダビデに告たればダビデ人を遣はしてかれらを迎へしむ

其人々大に恥たればなり即ち王いふ汝ら鬚の長るまでエリコに止まりて然るのち歸るべしと
アンモンの子孫自己のダビデに悪まるを見しかばアンモンの子孫人を遣はしてベテレホブのスリア人と

ゾバのスリア人の歩兵二萬人およびマアカの王より一千人トブの人より一萬二千人を雇ひたり
ダビデ聞てヨアブと勇士の惣軍を遣はせり
アンモンの子孫出て門の入口に軍の陣列をなしたりゾバとレホブのスリア人

およびトブの人とマアカの人は別に野に居り
ヨアブ戦の前後より己に向ふを見てイスラエルの選抜の兵の中をを選びてこれをスリア人に對ひて備へしめ

イ母後九・七、一一、ハ代上八・三四
一三、一九、二八
ニ母後九・七、一〇
ト摩二〇・四、四七、二
リ母後八・三、五
ヲ母後一〇・六
ロ母後一九・一七
ホ母後九・三
ヘ代上一九・一
ニ一母前二一・四
ル母後二三・八
チ創三四・三〇
出五
ヌ士一一・三、五

ワ中三一・六
カ母前四・九
一六・二三
ヨ母前三・一八
タ代上一九・一六
レ代上一九・一八
ツ王上二〇・二二、二二
ナ申二二・八
六代下三六・一〇
ラ創三四・二
伯三一
一・二 太五・二八
ム代上三・五

二〇 其餘の民をば其兄弟アビシヤイの手に交してアンモンの子孫に向て備へしめて 一
いひけるは若スリア人

三 我に手強からば汝我を助けよ若アンモンの子孫汝に手剛からば我ゆきて汝をたすけん 一
汝勇ましくなれよ

二 我ら民のためとわれらの神の諸邑のために勇しく爲んねがはくはエホバ其目によしと見ゆるところをなしたまへ

三 一ヨアブ己と共に在る民と共にスリア人にむかひて戦んとて近づきければスリア人彼のまへより逃たり 一
ア

二 ンモンの子孫スリア人の逃たるを見て亦自己等もアビシヤイのまへより逃て城邑にいりぬヨアブすなはちアンモ

一 ンの子孫の所より還りてエルサレムにいたる

二 一五 スリア人其イスラエルのまへに敗れたるを見て俱にあつまれり 一
ハダデゼル人をやりて河の前岸にをる

二 七 スリア人を將ゐ出して皆へラムにきたらしむハダデゼルの軍の長シヨバクかれらを率ゐたり 一
其事ダビデに聞

一 八 えければ彼イスラエルを悉く集めてヨルダンを涉りてへラムに來りスリア人ダビデに向ひて備へ之と戦ふ

二 九 スリア人イスラエルのまへより逃ければダビデ、スリアの兵車の人七百騎兵四萬を殺し又其軍の長シヨバ

一 九 クを撃てこれを其所に死しめたり 一
ハダデゼルの臣なる王等其イスラエルのまへに壞れたるを見てイスラエル

一 九 と平和をなして之に事へたりスリア人は恐れて再びアンモンの子孫を助くることをせざりき

第一章

一 遣はせり彼等アンモンの子孫を滅ぼしてラバを圍めりされどダビデはエルサレムに止りぬ

二 爰に夕暮にダビデ其床より興きいでて王の家の屋蓋のうへに歩みしが屋蓋より一人の婦人の體をあらふを

三 見たり其婦は觀るに甚だ美し 一
ダビデ人を遣して婦人を探らしめしに或人いふ此はエリアムの女バテシバにて

四 ヘテ人ウリヤの妻なるにあらずやと 四 ダビデ乃ち使者を遣はして其婦を取る婦彼に來りて彼婦と寝たりしかし
 五 て婦其不潔を清めて家に歸りぬ 五 かくて婦孕みければ人をつかはしてダビデに告ていひけるは我子を孕めりと
 六 是においてダビデ人をヨアブにつかはしてヘテ人ウリヤを我に遣はせといひければヨアブ、ウリヤをダビ
 七 デに遣はせり 七 ウリヤ、ダビデにいたりしかばダビデこれにヨアブの如何なると民の如何なると戦争の如何な
 八 るを問ふ 八 しかしてダビデ、ウリヤにいひけるは汝の家に下りて足を洗へとウリヤ王の家を出るに王の贈物
 九 其後に從ひてきたる 九 然どウリヤは王の家の門に其主の僕等とともに寝ておのれの家にくだりいたらず
 一〇 人々ダビデに告てウリヤ其家にくだり至らずといひければダビデ、ウリヤにいひけるは汝は旅路をなして來
 一 れるにあらずや何故に自己の家にくだらざるや 一 ウリヤ、ダビデにいひけるは櫃とイスラエルとユダは小屋の
 二 中に住まりわが主ヨアブとわが主の僕は野の表に陣を取るに我いかでわが家にゆきて食ひ飲しました妻と寝べけん
 三 や汝は生また汝の靈魂は活く我此事をなさじ 三 ダビデ、ウリヤにいふ今日も此にとどまれ明日我汝を去しめん
 四 とウリヤ其日と次の日エルサレムにとどまりしが 四 ダビデかれを召て其まへに食ひ飲せしめダビデかれを酔し
 五 めたり晩にいたりて彼出て其床に其主の僕と共に寝たりされどおのれの家にはくだりゆかさざりき
 六 朝におよびてダビデ、ヨアブへの書を認めて之をウリヤの手によりて遣れり 六 ダビデ其書に書ていはく
 七 汝らウリヤを烈しき戦の先鋒にいだしてかれの後より退きて彼をして戦死せしめよ 七 是においてヨアブ城邑を
 八 窺ひてウリヤをば其勇士の居ると知る所に置り 八 城邑の人出てヨアブと戦ひしかばダビデの僕の中の數人仆れ
 九 ヘテ人ウリヤも死り 九 ヨアブ人をつかはして軍の事を悉くダビデに告げしむ 九 ヨアブ其使者に命じていひけ

イ母後二三・三九 一八・一九 へ母後二〇・六 リ王上二一・八、九
 口詩五一・雅一・一四 二創一八・四、一九・二 ト創一九・三三、三五 又母後一一・九
 ハ利一五・一九、二八、ホ母後七・二、六 十母後一一・九
 ル士六・三二 二〇・三五、四一
 七士九・五三 三母後一四・五 王上 夕母後二六・一六

二〇 是は汝が軍の事を皆王に語り終しとき 王もし怒りを發して汝に汝らなんぞ戰はんとて城邑に近づきしや汝らは彼らが石垣の上より射ることを知らざりしや エルベセテの子アビメレクを撃し者は誰なるや一人の婦が石垣の上より磨の上石を投て彼をテベツに殺せしにあらずや何ぞ汝ら城垣に近づきしやと言はば汝言べし汝の僕へテ人ウリヤもまた死りと

二三 使者ゆきてダビデにいたりヨアブが遣はしたるところのことをごとく告げたり 使者ダビデにいひけるは敵我儕に手強かりしが城外にいでて我儕にいたりしかば我儕これに迫りて門の入口にまでいたれり 時

二四 に射手の者城垣の上より汝の僕を射たりければ王の僕或者死に亦汝の僕へテ人ウリヤも死りと ダビデ使者にいひけるは斯汝ヨアブに言べし此事を憂ふるなかれ刀劍は此をも彼をも同じく殺すなり強く城邑を攻て戦ひ之を陥るべしと汝かくヨアブを勵ますべし

二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

ウリヤの妻其夫ウリヤの死たるを聞て夫のために悲哀り 其喪の過し時ダビデ人を遣はしてかれをおのれの家に召いる彼すなはちその妻となりて男子を生り但しダビデの爲たる此事はエホバの目に悪かりき

第二章

一 エホバ、ナタンをダビデに遣はしたまへば彼ダビデに至りてこれにいひけるは一の邑に二箇の人あり一は富て一は貧し 其富者は甚だ多くの羊と牛を有り されど貧者は唯自己の買て育て

二 たる一の小き牝羔の外は何をも有ざりき其牝羔彼およびかれの子女とともに生長ちかれの食物を食ひかれの椀に飲みまた彼の懷に寢て彼には女子のごとくなりき 時に一人の旅人其富る人の許に來りけるが彼おのれの羊と牛の中を取りてそのおのれに來れる旅人のために烹を惜みてかの貧き人の牝羔を取りて之をおのれに來れる人のために烹たり 五 ダビデ其人の事を大に怒りてナタンにいひけるはエホバは生く誠に此をなしたる人は死すべき

六 なり 且六彼此六事をなしたるに因よりまた憐憫あはれまざりしによりて其その牝羔めつじを四倍しほいになして償つくふべし

七 ナタン、ダビデにいひけるは汝なんぢは其人そのひとなりイスラエルの神かみエホバ斯かいひたまふ我われ汝なんぢに膏あぶらを沃そいでイスラ

八 エルの王わうとなし我われ汝なんぢをサウルの手てより救すくひいだし 汝なんぢに汝なんぢの主人しゆじんの家いへをあたへ汝なんぢの主人しゆじんの諸妻つまたちを汝なんぢの懐ふところに

九 與あたへまたイスラエルとユダの家いへを汝なんぢに與あたへたり若もし少すくなからば我われ汝なんぢに種々いろくの物ものを増ましくはへしならん 何ぞ汝なんぢエホ

バの言ことばを藐視かろんじて其目そのめのまへに惡あくをなせしや汝なんぢ刃劍やたなをもてへテ人ひとウリヤを殺ころし其妻そのつまをとりて汝なんぢの妻つまとなせり即ち

一〇 アンモンの子孫ひとごの劍かたなをもて彼かれを斬殺きりころせり 汝なんぢ我われを輕かろんじてへテ人ひとウリヤの妻つまをとり汝なんぢの妻つまとなしたるに因よりて劍

二 何時いつまでも汝なんぢの家いへを離はなるゝことなかるべし エホバ斯かいひたまふ視みよ我われ汝なんぢの家いへの中うちより汝なんぢの上に禍わざはひを起おこすべし

三 我われ汝なんぢの諸妻つまたちを汝なんぢの目めのまへに取とりて汝なんぢの隣人となりに與あたへん其人そのひと此日このひのまへにて汝なんぢの諸妻つまたちとともに寢いねん 其そのは汝なんぢは密ひそに

四 事をなしたれど我われはイスラエルの衆ひとのまへと日ひのまへに此事このことをなすべければなりと ダビデ、ナタンにいふ

五 我われエホバに罪つみを犯とがしたりナタン、ダビデにいひけるはエホバまた汝なんぢの罪つみを除のぞきたまへり汝なんぢ死しなざるべし されど

六 汝なんぢ此所このところ行いによりてエホバの敵てきに大おほいなる罵ののしる機そり會あを與あたへたれば汝なんぢに生うれし其子そのこ必ず死しなべしと かくてナタン

七 其家そのいへにかへれり 爰こゝにエホバ、ウリヤの妻つまがダビデに生うる子こを撃うちたまひければ痛いたく疾やめり ダビデ其子そのこのために神かみに乞こひ求もと

八 む即ちすなはちダビデ斷食だんじきして入り終夜よもすがら地に臥ふしたり ダビデの家いへの年寄等としよりたち彼の傍かたはらに立ちてかれを地ちより起たしめんと

九 せしかども彼かれ肯かへんぜず又またかれらとともに食しよくを爲なざりき 第七日なほなに其子そのこ死しなりダビデの僕しもべ其子そのこの死しなることをダビデ

十 に告つぐることを恐おそれたりかれらいひけるは子の尙生なほいる間あひだに我われ儕ら彼かれに語いひたりしに彼かれ我われ儕らの言ことばを聽きいれざりき如何いかんぞ

イ出二三・一 路一九 八母前一五・一九 一六、一七、二七 一六二二 又母後二四・一〇 伯 八・二三 米七・一八 亞三・四 二二四
・八 二民一五・三一 へ歴七九 七二〇 詩三二・ル母後二四・一〇 伯 七 賽五二・五 結三六 母後一三・三一
ロ母前一六・一三 母後一一・一五、 申二八・三〇 母後 一 母前一五・二四 五、五一・四 箴二 七二二 詩三三・一 二二〇、二三 羅二、

民は皆エルサレムに還りぬ

第一三章

- 一 此後ダビデの子アブサロムにタマルと名くる美しき妹ありしがダビデの子アムノンこれを戀ひたり
- 二 アムノン心を苦しめて遂に其姉妹タマルのためにわづらへり其はタマルは處女なりければ
- 三 アムノンかれに何事をも爲しがたしと思ひたればなり
- 四 然るにアムノンに一人の朋友ありダビデの兄弟シメアの子にして其名をヨナダブといふヨナダブは甚だ有智き人なり
- 五 彼アムノンにいひけるは汝王の子なんぞ日に斯く瘠ゆくや汝我に告ざるやアムノン彼にいひけるは我わが兄弟アブサロムの妹タマルを戀ふ
- 六 ヨナダブかれにいひけるは床に臥て病と伴り汝の父の來りて汝を見る時これにいへ請ふわが妹タマルをして來りて我に食を予へしめわが見て彼の手より食ふことをうる様にわが目のまへにて食物を調理しめよと
- 七 アムノンすなはち臥して病と伴りしが王の來りておのれを見る時アムノン王にいひけるは請ふ吾妹タマルをして來りてわが目のまへにて二の菓子を作へしめて我にかれの手より食ふことを得さしめよと
- 八 是においてダビデ、タマルの家にいひつかはしけるは汝の兄アムノンの家にゆきてかれのために食物を調理よと
- 九 タマル其兄アムノンの家にとりて之を搏てかれの目のまへにて菓子を作へ其菓子を焼き
- 一〇 鍋を取て彼のまへに傾出たりしかれども彼食ふことを否めりしかして
- 一一 アムノンいひけるは汝ら皆我を離れていでよと皆かれをはなれていでたり
- 一二 アムノン、タマルにいひけるは食物を寢室に持きたれ我汝の手より食はんとタマル乃ち己の作りたる菓子を取りて寢室に持ゆきて其兄アムノンにいたる
- 一三 タマル彼に食しめんとて近く持いたれる時彼タマルを執へて之にいひけるは妹よ來りて我と寢よ

イ母後三・二、三
 口代上三・九
 八母前一六・九
 二創一八・六
 水創四五・一
 へ創三九・二二

ト創三四・二
 子利一八・九、一一、
 二〇・二七
 リ創三四・七、十一、九、ル申二二・二五、
 二二・二一、
 又利一八・九、一一、
 ヲ創三七・三、
 士五・
 三〇、詩四五・一四、
 二、伯二・二二、
 二四、
 三〇、詩四五・一四、
 母後一、
 ヨ創二四・五〇、三一、
 二四、
 夕利一九・二七、一八、
 夕利三八・二二、一三、
 母前二五・四、三六

二二 タマルかれにいひける否兄上よ我を辱しむるなかれ是のごとき事はイスラエルに行はれず汝此愚なる事を
 二三 なすべからず 我は何處にわが恥辱を棄んか汝はイスラエルの愚人の一人となるべしされば請ふ王に語れ彼我
 二四 を汝に予ざることなかるべしと 然どもアムノン其言を聽ずしてタマルよりも力ありければタマルを辱しめて
 これと偕に寢たりしが

一五 遂にアムノン甚だ深くタマルを惡むにいたる其かれを惡む所の惡みはかれを戀ひたるところの戀よりも大
 一六 なり即ちアムノンかれにいひけるは起て往けよ かれアムノンにいひけるは我を返して此惡を作るなかれ是は
 一七 汝がさきに我になしたる所の惡よりも大なりとしかれども聽いれず 其側に仕ふる少者を呼ていひけるは汝
 一八 此女をわが許より遣りいだして其後に戸を鍵せと タマル振袖を着たり王の女等の處女なるものは斯のごと
 一九 き衣服をもて粧ひたりアムノンの侍者かれを外にいだして其後に戸を鍵せり タマル灰を其首に蒙り着たる

振袖を裂き手を首にのせて呼はりつゝ去ゆけり
 二〇 其兄アブサロムかれにいひけるは汝の兄アムノン汝と偕に在しや然ど妹よ黙せよ彼は汝の兄なり此事を
 二一 心に留るなかれとかくてタマルは其兄アブサロムの家に凄しく住み居れり 二二 ダビデ王是等の事を悉く聞て甚だ

怒れり アブサロムはアムノンにむかひて善も惡きも語ざりき其はアブサロム、アムノンを惡みたればなり
 是はかれがおのれの妹タマルを辱しめたるに由り

全二年の後アブサロム、エフライムの邊なるバアルハヅルにて羊の毛を剪しめ居て王の諸子を悉く招けり
 アブサロム王の所にいりていひけるは視よ僕羊の毛を剪しめをるねがはくは王と王の僕等僕とともに來り

二五 たまへ 王アブサロムに云けるは否わが子よ我儕を皆いたらしむるなかれおそらくは汝の費を多くせんアブサ
 二六 ロム、ダビデを強ふしかれどもダビデ往ことを肯せずして彼を視せり アブサロムいひけるは若しからずば請
 二七 ふわが兄アムノンをして我らとともに來らしめよ王かれにいひけるは彼なんぞ汝とともにゆくべけんやと
 二八 れどアブサロムかれを強ければアムノンと王の諸子を皆アブサロムとともにゆかしめたり 爰にアブサロム其
 二九 少者等に命じていひけるは請ふ汝らアムノンの心の酒によりて樂む時を視すましてわが汝等にアムノンを撃てと
 三〇 言ふ時に彼を殺せ懼るゝなかれ汝等に之を命じたるは我にあらずや汝ら勇しく武くなれと アブサロムの少者
 三一 等アブサロムの命ぜしごとくアムノンになしければ王の諸子皆起て 各其騾馬に乗て逃たり
 三二 彼等が路にある時風聞ダビデにいたりていはくアブサロム王の諸子を悉く殺して一人も遺るものなしと
 三三 王乃ち起ち其衣を裂きて地に臥す其臣僕皆衣を裂て其傍にたてり ダビデの兄弟シメアの子ヨナダブ答へ
 三四 ていひけるは吾主よ王の御子等なる少年を皆殺したりと思たまふなかれアムノン獨り死るのみ彼がアブサロムの
 三五 妹タマルを辱かしめたる日よりアブサロム此事をさだめおきたるなり されば吾主王よ王の御子等皆死りと
 三六 いひて此事をおもひ煩ひたまふなかれアムノン獨死たるなればなりと
 三七 斯てアブサロムは逃れたり爰に守望をたる少者目をあげて視たるに視よ山の傍よりして己の後の道より
 三八 多くの人來れり ヨナダブ王にいひけるは視よ王の御子等來る僕のいへるがごとくしかりと 彼語ることを
 三九 終し時視よ王の子等來り聲をあげて哭り王と其僕等も皆大に甚く哭り
 四〇 偕アブサロムは逃てゲシユルの王アミホデの子タルマイにいたるダビデは日々其子のために悲めり

イ士一九・六、九、二二 詩一〇四・一五
 得三・七 母前二五 口書一・九
 三六 帖一・一〇 八 母後一・二一

二 母後二二・一六
 水 母後一三・三
 へ 母後一九・一九

ト 母後二三・三八
 チ 母後三・三

三六 彼語ることを
 三九 終し時視よ王の子等來り聲をあげて哭り王と其僕等も皆大に甚く哭り
 四〇 偕アブサロムは逃てゲシユルの王アミホデの子タルマイにいたるダビデは日々其子のために悲めり

リ母後一四・二三、三
ル創三八・二二
二、一五・八
ヲ母後一三・三九
ワ代下一一・六
カ得三・三
ヨ母後一四・一九 出
四・一五
タ母前二〇・四一 母
後一・二一
レ王下六・二六、二八
ツ民三五・一九 申
一九・二二
ナ創二七・二三 母前
二五・二四 太二七
二二五
ナ母後三・二八、二九
ム母前一四・四五 徒
王上二・三三
ラ民三五・一九
二七・三四

三九 ブサロム逃てゲシユルにゆき三年彼處に居たり 三九 ダビデ王アブサロムに逢んと思ひ煩らふ其はアムノンは死た
るによりてダビデかれの事はあきらめられたればなり

第一四章

一 ゼルヤの子ヨアブ王の心のアブサロムに趣くを知れり 二 ヨアブ乃ちテコアに人を遣りて彼處よ
り一人の哲婦を呼きたらしめて其婦にいひけるは請ふ汝喪にある眞似して喪の服を着油を身に
三 ぬらず死者のために久しく哀しめる婦のごとく爲りて 三九 王の所にいたり是のごとくかれに語るべしとヨアブ

其語言をかれの口に授けたり

四 テコアの婦王にいたり地に伏て拜し王にいひけるは王よ助けたまへ 五 王婦にいひけるは何事なるや婦

六 いひけるは我は實に嫠婦にしてわが夫は死り 六つかへめ 仕女に二人の子あり俱に野に争ひしが誰もかれらを排解もの

七 なきにより此遂に彼を撃て殺せり 七二 是において視よ全家仕女に逼りていふ其兄弟を撃殺したる者を付せ我ら

かれをその殺したる兄弟の生命のために殺さんと斯く嗣子をも滅ぼし存れるわが炭火を熄てわが夫の名をも遺存

をも地の面に無らしめんとす

八 王婦にいひけるは汝の家に往け我汝の事につきて命令を下さん 九 テコアの婦王にいひけるは王わが主よ

一〇 ねがはくは其罪は我とわが父の家に歸して王と王の位には罪あらざれ 一〇 王いひけるは誰にても爾に語る者をば

我に將來れしかせば彼かさねて爾に觸ること无るべし 一一 婦いひけるは願くは王爾の神エホバを憶えてかの仇を

報ゆる者をして重て滅すことを爲しめず我子を斷ことなからしめたまへと王いひけるはエホバは生く爾の子の

髪の毛一すぢも地に隕ることなかるべし

婦いひけるは請ふ仕女をして一言わが主王に言しめたまへダビデいひけるは言ふべし 婦いひけるは爾

なんぞ斯る事を神の民にむかひて思ひたるや王此言を言ふにより王は罪ある者のごとし其は王その放れたる者を

歸らしめざればなり 抑我儕は死ざるべからず我儕は地に瀉れたる水の再び聚る能はざるがごとし神は生命

を取りたまはず方法を設けて其放れたる者をして己の所より放たれをることなからしむ 我此事を王我主に言

んとて來れるは民我を恐れしめたればなり故に仕女謂らく王に言ん王婢の言を行ひたまふならんと 其は王聞

て我とわが子を共に滅して神の産業に離れしめんとする人の手より婢を救ひいだしたまふべければなり 仕女

また思り王わが主の言は慰となるべしと其は神の使のごとく王わが主は善も悪も聽たまへばなりねがはくは爾

の神エホバ爾と共に在せと

王こたへて婦にいひけるは請ふわが爾に問んところの事を我に隠すなかれ婦いふ請ふ王わが主言たまへ

王いひけるは此すべての事においてはヨアブの手爾とともにあるや婦答へていひけるは爾の靈魂は活く王

わが主よ凡て王わが主の言たまひしところは右にも左にもまがらず實に爾の僕ヨアブ我に命じ是等の言を悉く

仕女の口に授けたり 其事の見ゆるところを變んとて爾の僕ヨアブ此事をなしたるなり然どわが主は神の使の

智慧のごとく智慧ありて地にある事を悉く知たまふと

是において王ヨアブにいひけるは視よ我此事を爲すされば往て少年アブサロムを携歸るべし ヨアブ

地に伏し拜し王を祝せりしかしてヨアブいひけるは王わが主よ王僕の言を行ひたまへば今日僕わが爾に惠るよ

を知ると ヨアブ乃ち起てゲシユルに往きアブサロムをエルサレムに携きたれり 王いひけるは彼は其家に

イ士二〇・二二 八伯三四・一五 來九 二八 へ母後一四・三三 子母後一三・三七 一・一三
ロ母後一三・三七、三 二・二七 ホ母後一四・二〇、一 ト母後一四・二七、一 又賽一・六
二民三五・一五、二五、 九二七 九二七 九二七 一五路一五・二〇 夕士九・二九
ヲ母後一四・二四 力母後二二・一一
ヨ王上一・五

退くべしわが面を見るべからずと故にアブサロム己の家に退きて王の面を覲ざりき

三三 儲イスラエルの中にアブサロムのごとく其美貌のために讚られたる人はなかりき其足の跣より頭の頂に

三二 いたるまで彼には瑕疵あることなし アブサロム其頭を剪る時其頭の髪を衡るに王の權衡の二百シケルあり

三七 毎年の終にアブサロム其頭を剪り是は己の重によりて剪たるなり アブサロムに三人の男子と一人のタマルと

いふ女子生れたりタマルは美女なり

三八 アブサロム二年のあひだエルサレムにをりたれども王の顔を見ざりき 是によりてアブサロム王に遣さ

三〇 んとてヨアブを呼に遣はしけるが彼來ることを肯せず再び遣せしかども來ることを肯ぜざりき アブサロム

其僕にいひけるは視よヨアブの田地は我の近くにありて其處に大麥あり往て其に火を放てとアブサロムの僕等

三一 田地に火を放てり ヨアブ起てアブサロムの家に來りてこれにいひけるは何故に爾の僕等田地に火を放たるや

三二 アブサロム、ヨアブにいひけるは我人を爾に遣はして此に來れ我爾を王につかはさんと語り即ち爾をして王

に我何のためにゲシユルよりきたりしや彼處に向あらば我ためには反て善しと言しめんとせり然ば我今王の面を

三三 見ん若し我に罪あらば王我を殺すべし ヨアブ王にいたりてこれに告たれば王アブサロムを召す彼王にいたり

て王のまへに地に伏て拜せり王アブサロムに接吻す

第一五章

一 此後アブサロム己のために戰車と馬ならびに己のまへに驅る者五十人を備たり アブサロム

二 夙く興きて門の途の傍にたち人の訴訟ありて王に裁判を求めんとて來る時はアブサロム其人を呼て

三 いふ爾は何の邑の者なるやと其人僕はイスラエルの某の支派の者なりといへば アブサロム其人にいふ見よ爾

四 の事は善くまた正し然ど爾に聽くべき人は王いまだ立すと アブサロム又嗚呼我を此地の士師となす者もがな

然れば凡て訴訟と公事ある者は我に來りて我之に公義を爲しあたへんといふ また人彼を拜せんとて近づく時

は彼手をのばして其人を扶け之に接吻す 六 アブサロム凡て王に裁判を求めんとて來るイスラエル人に是のごと

くなせり斯アブサロムはイスラエルの人々の心を取り

七 斯て四年の後アブサロム王にいひけるは請ふ我をして往てヘブロンにてエホバに我嘗て立し願を果さしめ

よ 八 其は僕スリアのゲシユルに居し時願を立て若しエホバ誠に我をエルサレムに携歸りたまはば我エホバに事

へんと言たればなりと 九 王かれにいひけるは安然に往けと彼すなはち起てヘブロンに往り 一〇 しかしてアブサ

ロム窺ふ者をイスラエルの支派の中に徧く遣はして言せけるは爾等喇叭の音を聞ばアブサロム、ヘブロンにて王

となれりと思ふべしと 二 二百人の招かれたる者エルサレムよりアブサロムとともにゆけり彼らは何心なくゆき

て何事をもしらざりき 三 アブサロム犠牲をさぐる時にダビデの議官ギロ人アヒトベルを其邑ギロより呼よせ

たり徒黨強くして民次第にアブサロムに加はりぬ

爰に使者ダビデに來りてイスラエルの人の心アブサロムにしたがふといふ 四 ダビデおのれと共にエルサ

レムに居る凡ての僕にいひけるは起てよ我ら逃ん然らずば我らアブサロムより遁るゝあたはざるべし急ぎ往け恐

らくは彼急ぎて我らに追ひつき我儕に害を蒙らせ刃をもて邑を撃ん 五 王の僕等王にいひけるは視よ僕等王わが

主の選むところを凡て爲ん 六 王いでゆき其全家これにしたがふ王十人の妾なる婦を遺して家をまもらしむ

王いでゆき民みな之にしたがふ彼等遠の家に息めり 八 かれの僕等みな其傍に進みケレテ人とペレテ人お

よび彼にしたがひてガテよりきたれる六百人のガテ人みな王のまへに進めり

イ羅一六・二八 二 母後一三・三八 三・五 一 母後一六・二 二 母後一六・二 一 母前二八・二〇・二二 ト 創二〇・五 リ 審一五・五一 ル 母後一五・六 士 九 ワ 詩三・ カ 母後一六・二二 二 ハ 母前一六・二 ヘ 母前九・二三、一六 チ 詩四一・九、五五 又 詩三・一 テ 母後一九・九 詩三・ 二 ヨ 母後八・一八

夕母後一八二 一七・二七、一八、 夕母後一六・二二
 レ母前二三・二三 二四 夕母後一六・二二
 ヲ得一・一六、一七 夕約一八・一 夕母後一六・二二
 ラ詩四三・三三 夕母後一六・二二
 ム民一四・八 母後 夕母後一六・二二
 二二・二〇 王上 ウ母前三・一八
 一〇・九代下九・八 井母前九・九
 ノ母後一七・一七 夕母後一七・一六
 オ母後一七・一六 ヤ賽二〇・二四
 ク母後一九・四 帖六 マ耶一四・三、四
 ヲ母後一七・一七 夕母後一七・一六
 フ詩三・一一、一、五五、
 一一二

一九 時に王ガテ人イツタイにいひけるは何ゆるゑに爾もまた我らとともにゆくや爾かへりて王とともにをれ爾は
 二〇 外國人にして移住て處をもとむる者なり 爾は昨日來れり我は今日わが得るところに往くなれば豈爾をして
 二一 我らとともにさまよはしむべけんや爾歸り爾の兄弟をも携歸るべしねがはくは恩と眞實爾とともにあれ イツ
 二二 タイ王に答へていひけるはエホバは活く王わが主は活く誠に王わが主いかなる處に坐すとも生死ともに僕もまた
 二三 其處に居るべし 三三 ダビデ、イツタイにいひけるは進みゆけガテ人イツタイ乃ち進みかれのすべての從者および
 三四 かれとともにある妻子皆進めり 國中皆大聲をあげて哭き民皆進む王もまたキデロン川を渡りて進み民皆進み
 三三 野の道におもむけり
 三四 視よザドクおよび俱にあるレビ人もまた皆神の契約の櫃を昇ていたり神の櫃をおろして民の悉く邑より
 三五 いづるをまてりアピヤタルもまたのぼれり 二五 こゝに王ザドクにいひけるは神の櫃を邑に昇もどせ若し我エホバ
 三六 のまへに恩をうるならばエホバ我を携かへりて我にこれを見し其往處を見したまはん 二六 されどエホバもし我
 三七 汝を悦ばずと斯いひたまはば視よ我は此にあり其目に善と見ゆるところを我になしたまへ 二七 王また祭司ザドク
 三八 にいひけるは汝先見者汝らの二人の子即ち汝の子アヒマアズとアピヤタルの子ヨナタンを伴ひて安然に城邑に
 三九 歸れ 二八 見よ我は汝より言のきたりて我に告るまで野の渡場に留まらんと 二九 ザドクとアピヤタルすなはち
 三〇 神の櫃をエルサレムに昇もどりて彼處に止まれり

三〇 ここにダビデ橄欖山の路を陟りしが陟るときに哭き其首を蒙みて跣足にて行りかれと俱にある民皆各其
 三一 首を蒙みてのぼり哭つゝのぼれり 時にアヒトベルがアブサロムに與せる者の中にあることダビデに聞えけれ

三二 ばダビデいふエホバねがはくはアヒトベルの計策を愚ならしめたまへと
 三三 爾の時視よアルキ人ホシヤイ衣を裂き土を頭にかむりてきたりてダビデを迎ふ
 三四 我とともに進まば我の負となるべし
 三五 べし此まで爾の父の僕たりしごとく今また汝の僕となるべしといはば爾はわがためにアヒトベルの計策を敗るに
 三六 いたらん
 三六 祭司ザドクとアビヤタルとともに彼處にあるにあらずや是故に爾が王の家より聞たる事はことごとく祭司ザドクとアビヤタルに告べし
 三七 とアビヤタルの子ヨナタンをるなり爾ら其聞たる事をことごとく彼等の手によりて我に通すべし
 ホシヤイすなはち城邑にいたりぬ時にアプサロムはエルサレムに入居たり

第一十六章

一 二百 乾葡萄一百球 乾棗の團塊一百 酒一囊を載きたりてダビデを迎ふ
 二 此等は何なるかチバいひけるは驢馬は王の家族の乗るためパンと乾棗は少者の食ふため酒は野に困憊たる者の飲むためなり
 三 王いひけるは爾の主人の子は何處にあるやチバ王にいひけるはかれはエルサレムに止まる其は彼イスラエルの家今日我父の國を我にかへさんと言をればなり
 四 王チバにいひけるは視よメビボセテの所有は悉く爾の所有となるべしチバいひけるは我拜す王わが主よ我をして爾のまへに恩を蒙むらしめたまへ
 五 斯てダビデ王バホルムにいたるに視よ彼處よりサウルの家の族の者一人出きたる其名をシメイといふゲラの子なり彼出きたりて來りつゝ詛へり
 六 又彼ダビデとダビデ王の諸の臣僕にむかひて石を投たり時に民と勇士

イ母後一六・二三、一 八母後一・二二
 七・二四、二三 二母後一九・三五
 一母後一六・一九 六母後一五・二七
 一母後一七・一五、一 一母後一六・二六 代 又母後一五・三〇、三 一母後一八・二三
 上三七・三三 二 七・二九
 一母後一六・一五 一母後九・二二 一母後一九・二七
 一母後一六・一五 一母後九・二二 一母後一九・二七
 上二・八、四四 一母後一・一六 三

二八、二九、四・一 五七王上二・三三、 母後九・八 彼前二・三三 ノ創二九・三二 母前 オ羅八・二八 母後一九・二五 箴
一、二二 三三 未出二二・二八 ラ王下二八・二五 哀 ウ創一五・四 一・二一 詩二五・ク 母後一五・三七 一七・一七 母後一九・二五 箴
ソ士九・二四、五六、 ヅ 母前二四・一四 ナ 母後一九・二二 三・三八 井 母後二二・二一 一八 ヤ 母後一五・三七 ケ 母後一五・三四

八七 皆王の左右にあり 七 シメイ詛の中に斯いへり汝血を流す人よ爾邪なる人よ出され出され 八 爾が代りて位に登りしサウルの家の血を凡てエホバ爾に歸したまへりエホバ國を爾の子アブサロムの手付したまへり視よ爾は血を流す人なるによりて禍患の中にあるなり

九 ゼルヤの子アビシヤイ王にいひけるは此死たる大なんぞ王わが主を詛ふべけんや請ふ我をして涉りゆきて

一〇 かれの首を取しめよ 一〇 王いひけるはゼルヤの子等よ爾らの與るところにあらず彼の詛ふはエホバ彼にダビデを

二 詛へと言たまひたるによるなれば誰か爾なんぞ然するやと言べけんや 二一 ダビデ又アビシヤイおよび己の諸の

臣僕にいひけるは視よわが身より出たるわが子がわが生命を求む況や此ベニヤミン人をや彼を聽して詛はしめよエ

ホバ彼に命じたまへるなり 二二 エホバわが艱難を俯視たまふことあらん又エホバ今日彼の詛のために我に善を

報いたまふことあらんと 二三 斯てダビデと其從者途を行けるにシメイはダビデに對へる山の傍に行て行つゝ詛ひ

また彼にむかひて石を投げ塵を揚たり 二四 王および俱にある民皆アエビムに來りて彼處に息をつげり

二五 偕アブサロムと總ての民イスラエルの人々エルサレムに至れりアヒトベルもアブサロムとともにいたる

二六 ダビデの友なるアルキ人ホシヤイ、アブサロムの許に來りし時アブサロムにいふ願くは王 二七 壽 かれ願くは王

二七 壽 かれ 二七 アブサロム、ホシヤイにいひけるは此は爾が其友に示す厚意なるや爾なんぞ爾の友と往ざるやと

二八 ホシヤイ、アブサロムにいひけるは然らずエホバと此民とイスラエルの總の人々の選む者に我は屬し且其人

二九 とともに居るべし 一九 かつまたわられたれ 且又我誰に事ふべきか其子の前に事べきにあらずや我は爾の父のまへに事しごとく爾の

まへに事べし

二〇 爰にアブサロム、アヒトベルにいひけるは我儕如何に爲べきか爾等計を爲すべしと アヒトベル、ア

三 聞ん而して爾とともにをる總の者の手強くなるべしと 是において屋脊にアブサロムのために天幕を張ければ

三 アブサロム、イスラエルの目のまへにて其父の妾等の處に入りぬ 當時アヒトベルが謀れる謀計は神の言に

第一七章

一 時にアヒトベル、アブサロムにいひけるは請ふ我に一萬二千の人を擇み出さしめよ我起て今夜ダ

三 逃ん時に我王一人を撃とり 總の民を爾に歸せしむべし夫衆の歸するは爾が求むる此人に依なれば民みな平穩

四 なるべし 此言アブサロムの目とイスラエルの總の長老の目に的當と見えたり

五 アブサロムいひけるはアルキ人ホシヤイをも召きたれ我等彼が言ふ所をも聞んと ホシヤイ乃ちアブサ

六 ロムに至るにアブサロムかれにかたりていひけるはアヒトベル是のごとく語り我等其言を爲すべきか若し可ずば爾

八 言ふべし ホシヤイ、アブサロムにいひけるは此時にあたりてアヒトベルが授けし計略は善らず ホシヤイ

九 またいひけるは爾の知るごとく爾の父と其從者は勇士なり且彼等は野にて其子を奪れたる熊の如く其氣激怒をれ

一〇 ならば其を聞く者は皆アブサロムに従ふ者の中に敗ありと言はん しからば獅子の心のごとき心ある勇猛き夫と

二 いふとも全く挫碎ん其はイスラエル皆爾の父の勇士にして彼とともにある者の勇猛き人なるをしればなり 我

イ母後一五・一六、二

一三・四

一三・四

二母後二二・二一、一

一六・二四

母後

チ母前一八・二〇

ル書二・一一

口創三四・三〇 母前

一三

一三

ホ母後一五・二二

ト亞一三・七

又士一八・二五

リ何一三・八

ナ士二〇・一
ワ創二二・一七
カ母後一五・三三、三
ヨ母後一五・三五
タ母後一五・二八
レ母後一五・二七、三
一六
ツ書二・四
ソ書一五・七、一八・ネ母後一六・六
ナ書二・六
ラ出二・一九
四、五
書二
ム母後一七・一五、一
六

は計議るイスラエルをダンよりベエルシバにいたるまで海濱の沙の多きが如くに悉く爾の處につどへ集めて爾

親ら戦陣に臨むべし 我等彼の見出さるゝ處にて彼を襲ひ露の地に下るがごとく彼のうへに降らんしかして

彼および彼とともにあるすべての人々を一人も遺さざるべし 若し彼何かの城邑に集らばイスラエル皆繩を

其城邑にかけ我等これを河に曳きたふして其處に一の小石も見えざらしむべしと アブサロムとイスラエルの

人々皆アルキ人ホシヤイの謀計はアヒトベルの謀計よりも善しといふ其はエホバ、アブサロムに禍を降さんとして

エホバ、アヒトベルの善き謀計を破ることを定めたまひたればなり

爰にホシヤイ祭司ザドクとアビヤタルにいひけるはアヒトベル、アブサロムとイスラエルの長老等のため

に斯々に謀れりまた我は斯々に謀れり されば爾ら速に人を遣してダビデに告て今夜野の渡場に宿ることなく

速に渡りゆけといへおそらくは王および俱にある民皆呑つくされん 時にヨナタンとアヒマアズはエンロゲ

ルに俟居たり是は城邑にいるを見られざらんとてなり爰に一人の仕女ゆきて彼等に告げければ彼らダビデ王に告

んとて往く しかるに一人の少者かれらを見てアブサロムにつげたりされど彼等二人は急ぎさりてバホルムの

或人の家にいたる其人の庭に井ありてかれら其處にくだりければ 婦蓋をとりて井の口のうへに掩け其上に擣

たる麥をひろげたり故に事知れざりき 時にアブサロムの僕等其婦の家に來りていひけるはアヒマアズとヨナ

タンは何處にをるや婦かれらに彼人々は小川を濟れりといふかれら尋ねたれども見當ざればエルサレムに歸れり

彼等が去し時かの二人は井よりのぼりて往てダビデ王に告げたり即ちダビデに言けるは起て速かに水を濟

れ其はアヒトベル斯爾等について謀計を爲したればなりと だビデ起て己とともにある凡ての民とともにヨル

三 ダンを濟れり曙には一人もヨルダンを濟らざる者はなかりき
アヒトベルは其謀計の行れざるを見て其驢馬
に鞍おき起て其邑に往て其家にいたり家の人に遺言して自ら縊れ死て其父の墓に葬らる

二四 爰にダビデ、マハナイムに至る又アブサロムは己とともにあるイスラエルの凡の人々とともにヨルダンを

二五 濟れり アブサロム、アマサをヨアブの代りに軍の長と爲りアマサは夫のナハシの女にてヨアブの母ゼルヤの

二六 妹なるアビガルに通じたるイシマエル人名はエテルといふ人の子なり
かくてイスラエルとアブサロムはギ

二七 レアデの地に陣どれり

二七 ダビデ、マハナイムにいたれる時アンモンの子孫の中なるラバのナハシの子シヨビとロデバルのアンミエ

二八 ルの子マキルおよびロゲリムのギレアデ人バルジライ
臥床と鍋釜と陶器と小麦と大麦と粉と烘麥と豆と

二九 小豆の烘たる者と 蜜と牛酪と羊と犢をダビデおよび俱にある民の食ふために持來れり其は彼等民は野にて

飢餓れ渴くならんと謂たればなり

第一八章

一 爰にダビデ己とともにある民を核べて其上に千夫の長 百夫の長を立たり
二 民を三に分ちて其一をヨアブの手に託け一をゼルヤの子ヨアブの兄弟アビシヤイの手に託け一を

三 ガテ人イツタイの手に託けたりかくして王民にいひけるは我もまた必ず汝らとともに出んと
されど民いふ

四 汝は出べからず我儕如何に逃るとも彼等は我儕に心をとめじ又我儕半死とも我儕に心をとめざるべしされど汝は

我儕の一萬に等し故に汝は城邑の中より我儕を助けなば善し
王かれらにいひけるは汝等の目に善と見ゆると

五 ころを爲すべしとかくて王門の傍に立ち民皆或は百人或は千人となりて出づ
王ヨアブ、アビシヤイおよび

イ母後一五・一二 二創三二・二 書一三 へ代上二・二六、一七 七母後九・四 又母後一六・二
口王下二〇・一 二二六 母後二・八 ト母後一〇・一、一二 リ母後一九・三一、三 又母後一五・一九
ハ太二七・五 ホ代上二・二三、一六 二二九 二王上二・七 又母後二一・二七
ワ母後一八・一二 一 七母後一八・一二 一 七母後一八・五
カ書一七・二五、一八 一 七母後一四・二七
タ書七・二六 一 七母後一四・二七

イツタイに命じてわがために少年アブサロムを寛に待へよといふ王のアブサロムの事について諸の將官に命を下せる時民皆聞り

爰に民イスラエルにむかひて野に出でエフライムの叢林に戦ひしがイスラエルの民其處にてダビデの臣僕のままへに敗る其日彼處の戦死大にして二萬にいたれり

しかしして戦徧く其地の表に廣がりぬ是日叢林の滅ぼせる者は刀劍の滅ぼせる者よりも多かりき

爰にアブサロム、ダビデの臣僕に行き遭り時にアブサロム驃馬に乗居たりしが驃馬大なる橡樹の繁き枝の下を過ければアブサロムの頭其橡に繋りて彼天地のあひだにあがれり驃馬はかれの下より行過たり

一箇の人見てヨアブに告ていひけるは我アブサロムが橡樹に懸りをるを見たりと

ヨアブ其告たる人にいひけるはさらば爾見て何故に彼を其處にて地に撃落さざりしや我爾に銀十枚と一本の帯を與へんものを

其人ヨアブにいひけるは假令我わが手に銀千枚を受べきも我は手をいだして王の子に敵せじ其は王我儕の聞るまへにて爾とアビシヤいとイツタイに命じて爾ら各少年アブサロムを害するなかれといひたまひたればなり

我若し反いてかれの生命を戕賊はば何事も王に隠るゝ所なければ爾自ら立て我を責んと

時にヨアブ我かく爾とともに滞るべからずといひて手に三本の槍を携へゆきて彼の橡樹の中に尙生をるアブサロムの胸に之を衝通せり

ヨアブの武器を執る十人の少者繞きてアブサロムを撃ち之を死しめたり

かくてヨアブ喇叭を吹ければ民イスラエルの後を追ふことを息てかへれり

ヨアブ民を止めたればなり衆アブサロムを將て叢林の中なる大なる穴に投げいれ其上に甚だ大きく石を疊あけたり

是に於いてイスラエル皆おのおの其天幕に逃かへれり

アブサロム我はわが名を傳ふべき子なしと言て其生る間に己のために一

表柱を建たり王の谷にあり彼おのれの名を其表柱に與たり其表柱今日にいたるまでアブサロムの碑と稱らる

一九 爰にザドクの子アヒマアズいひけるは請ふ我をして趨りて王にエホバの王をまもりて其敵の手を免かれし

二〇 めたまひし音信を傳へしめよと ヨアブかれにいひけるは汝は今日音信を傳ふるものとなるべからず他日に

二一 音信を傳ふべし今日は王の子死たれば汝音信を傳ふべからず ヨアブ、クシ人にいひけるは往て爾が見たる所

二三 我をも亦クシ人の後より走ゆかしめよ ヨアブいひけるは我子よ爾は充分の音信を持ざるに何故に走りゆかんと

二三 するや されいふ何れにもあれ我をして走りゆかしめよと ヨアブかれにいふ走るべし是においてアヒマアズ

低地の路をはしりてクシ人を走越たり

二四 時にダビデは二の門の間に坐しむたり爰に守望者門の蓋上にのぼり石墻にのぼりて其目を擧て見るに視よ

二五 獨一人にて走きたる者あり 守望者呼はりて王に告ければ王いふ若し獨ならば口に音信を持つたらんと其人進

二六 み來りて近づけり 守望者復一人の走りきたるを見しかば守望者守門者に呼はりて言ふ獨一人にて走きたる

二七 者あり王いふ其人もまた音信を持ものなり 守望者言ふ我先者の走を見るにザドクの子アヒマアズの走るが

如しと王いひけるは彼は善人なり善き音信を持來るならん

二八 アヒマアズ呼はりて王にいひけるはねがはくは平安なれとかくて王のまへに地に伏していふ爾の神エホバ

二九 は讚べきかなエホバかの手をあげて王わが主に敵したる人々を付したまへり 王いひけるは少年アブサロムは

平安なるやアヒマアズこたへけるは王の僕 ヨアブ僕を遣はせし時我大なる噪を見たれども何をも知らざるなり

三〇 王いひけるは側にいたりて其處に立よと乃ち側にいたりて立つ

一 時に視よクシ人來れりクシ人いひけるはねがはくは王音信を受たまへエホバ今日爾をまもりて凡て爾に
 二 たち逆ふ者の手を免かれしめたまへり 王クシ人にいひけるは少年アブサロムは平安なるやクシ人いひけるは
 三 ねがはくは王わが主の敵および凡て汝に起ち逆ひて害をなさんとする者は彼少年のごとくなれと 王大に感
 四 門の樓にのぼりて哭り彼行ながらかくいへりわが子アブサロムよわが子わが子アブサロムよ嗚呼われ汝に代りて
 五 死たらん者をアブサロムわが子よわが子よ

第一九章

一 時にヨアブに告る者ありていふ視よ王はアブサロムの爲に哭き悲しむと 其日の勝利は凡の民
 二 の悲哀となれり其は民其日王は其子のために憂ふと言ふを聞たればなり 其日民は戦争に逃て羞
 三 たる民の竊て去がごとく竊て城邑にいりぬ 王は其面を掩へり王大聲に叫てわが子アブサロムよアブサロム
 四 わが子よわが子よといふ ことよにヨアブ家にいり王の許にいたりていひけるは汝今日汝の生命と汝の男子
 五 汝の女子の生命および汝の妻等の生命と汝の妾等の生命を救ひたる汝の凡の臣僕の顔を羞させたり 是は汝
 六 おのれを惡む者を愛しおのれを愛する者を惡むなり汝今日汝が諸侯伯をも諸僕をも顧みざるを示せり今日我
 七 さとる若しアブサロム生をりて我儕皆死たらば汝の目に適ひしならん されど今立て出で汝の諸僕を慰めて
 八 かたるべし我エホバを指て誓ふ汝若し出ずば今夜一人も汝とともに止るものなかるべし是は汝が若き時より今に
 九 いたるまでに蒙りたる諸の災禍よりも汝に惡かるべし 是に於て王たちて門に坐す人々凡の民に告て視よ王は
 十 門に坐し居るといひければ民皆王のまへにいたる

然どイスラエルはおのおの其天幕に逃かへれり イスラエルの諸の支派の中に民皆争ひていひけるは
 王は我儕を敵の手より救ひいだしました我儕をペリシテ人の手より助けいだせりされど今はアブサロムのために

一〇 國を逃いでたり 一〇 また我儕が膏そよぎて我儕の上におきしアブサロムは戦争に死ねりされば爾ら何ぞ王を導きかへらんことを言ざるや

一一 ダビデ王祭司ザドクとアピヤタルに言つかはしけるはユダの長老等に告て言へイスラエルの全家の言語

一二 王の家に達せしに爾ら何ぞ王を其家に導きかへる最後となるや 爾等はわが兄弟爾らはわが骨肉なりしかるに

一三 なんぞ爾等王を導き歸る最後となるやと 又アマサに言べし爾はわが骨肉にあらずや爾ヨアブにかはりて常に

一四 わがまへにて軍長たるべし若しからずば神我に斯なし又重ねてかくなしたまへと かくダビデ、ユダの凡の

人をして其心を傾けて一人のごとくにならしめければかれら王にねがはくは爾および爾の諸の臣僕歸りたまへと

一五 いひおくれり 是において王歸りてヨルダンにいたるにユダの人々王を迎へんとて來りてギルガルにいたり

王を送りてヨルダンを濟らんとす 時にバホルムのベニヤミン人ゲラの子シメイ急ぎてユダの人々とともに下りダビデ王を逃ふ 一千の

ベニヤミン人彼とともにあり亦サウルの家の僕チバも其十五人の男子と二十人の僕をしたがへて偕に居たりしが

皆王のまへにむかひてヨルダンをこぎ渡れり 時に王の家族を濟しました王の目に善と見ゆるところを爲んとて

濟舟を濟せり爰にゲラの子シメイ、ヨルダンを濟れる時王のまへに伏して 王にいひけるはわが主よねがはく

は罪を我に歸するなかれまた王わが主のエルサレムより出たまへる日に僕が爲たる悪き事を記憶えたまふなかれ

ねがはくは王これを心に置たまふなかれ 其は僕我罪を犯したるを知ればなり故に視よ我今日ヨセフの全家の

最初に下り來りて王わが主を逃ふと

イ母後一五・一四 二得一・一七 ト母後一六・五 王上 一六・二二、二一
 口母後五・一 ホ士二〇・一 二二八 リ母前二二・一五
 ハ母後一七・二五 へ書五・九 手母後九・二、一〇、又母後一六・五、六
 ル母後一三・三三
 テ母後一六・五

ワ出三三・二八
 カ母後一六・一〇
 ヨ母前一一・一三
 タ王上二・八、九、三
 ソ母後一六・一七
 ツ母後一六・三三
 ネ母後一四・一七、
 ナ母前二六・一六
 ラ母後九・七、一〇、
 ム王上二・七
 ウ母後一七・二七
 二〇
 二一
 二二
 二三
 二四
 二五
 二六
 二七
 二八
 二九
 三〇
 三二
 三三
 三四
 三五
 三六
 三七
 三八
 三九
 四〇
 四一
 四二
 四三
 四四
 四五
 四六
 四七
 四八
 四九
 五〇
 五一
 五二
 五三
 五四
 五五
 五六
 五七
 五八
 五九
 六〇
 六一
 六二
 六三
 六四
 六五
 六六
 六七
 六八
 六九
 七〇
 七一
 七二
 七三
 七四
 七五
 七六
 七七
 七八
 七九
 八〇
 八二
 八三
 八四
 八五
 八六
 八七
 八八
 八九
 九〇
 九一
 九二
 九三
 九四
 九五
 九六
 九七
 九八
 九九
 一〇〇
 一〇一
 一〇二
 一〇三
 一〇四
 一〇五
 一〇六
 一〇七
 一〇八
 一〇九
 一一〇
 一一一
 一一二
 一一三
 一一四
 一一五
 一一六
 一一七
 一一八
 一一九
 一二〇
 一二一
 一二二
 一二三
 一二四
 一二五
 一二六
 一二七
 一二八
 一二九
 一三〇
 一三一
 一三二
 一三三
 一三四
 一三五
 一三六
 一三七
 一三八
 一三九
 一四〇
 一四一
 一四二
 一四三
 一四四
 一四五
 一四六
 一四七
 一四八
 一四九
 一五〇
 一五一
 一五二
 一五三
 一五四
 一五五
 一五六
 一五七
 一五八
 一五九
 一六〇
 一六一
 一六二
 一六三
 一六四
 一六五
 一六六
 一六七
 一六八
 一六九
 一七〇
 一七一
 一七二
 一七三
 一七四
 一七五
 一七六
 一七七
 一七八
 一七九
 一八〇
 一八一
 一八二
 一八三
 一八四
 一八五
 一八六
 一八七
 一八八
 一八九
 一九〇
 一九一
 一九二
 一九三
 一九四
 一九五
 一九六
 一九七
 一九八
 一九九
 二〇〇

然にゼルヤの子アビシヤイ答へていひけるはシメイはエホバの膏そよぎし者を誣たるに因て其がために誅

さるべきにあらずやと 三三 ダビデいひけるは爾らゼルヤの子よ爾らのあづかるところにあらず爾等今日我に敵と

なる今日豈イスラエルの中にて人を誅すべけんや我豈わが今日イスラエルの王となりたるをしらざらんやと

是をもて王はシメイに爾は誅されじといひて王かれに誓へり

爰にサウルの子メビボセテ下りて王をむかふ彼は王の去し日より安かに歸れる日まで其足を飾らず其鬚を

飾らず又其衣を濯ざりき 三五 彼エルサレムよりきたりて王を透ふる時王かれにいひけるはメビボセテ爾なんぞ我

とともに往ざりしや 二六 彼こたへけるはわが主王よわが僕我を欺けり僕はわれ驢馬に鞍おきて其に乗て王の處に

ゆかんといへり僕跛者なればなり 二七 しかるに彼僕を王わが主に讒言せり然ども王わが主は神の使のごとし故に

爾の目に善と見るところを爲たまへ 二八 わが父の全家は王わが主のまへには死人なるのみなるに爾僕を爾の

席にて食ふ者の中に置たまへりされば我何の理ありてか重ねて王に哀訴することをえん 二九 王かれにいひけるは爾

なんぞ重ねて爾の事を言や我いふ爾とデバ其地を分つべし 三〇 メビボセテ王にいひけるは王わが主安然に其家に

歸りたまひたればかれに之を悉くとらしめたまへと

爰にギレアデ人バルジライ、ロゲリムより下り王を送りてヨルダンを渡らんとて王とともにヨルダンを濟

れり 三三 バルジライは甚だ老たる人にて八十歳なりきかれは甚だ大なる人なれば王のマハナイムに留れる間王を

養へり 三三 王バルジライにいひけるは爾我とともに濟り來れ我エルサレムにて爾を我とともに養はん 三四 バルジ

ライ王にいひけるはわが生命の年の日尙幾何ありてか我王とともにエルサレムに上らんや 三五 我は今日八十歳

なり善きと悪きとを辨へるをえんや僕其食ふところと飲ところを味ふをえんや我再び謳歌之男と謳歌之女の聲を

聽えんや僕なんぞ尙王わが主の累となるべけんや 僕は王とともにヨルダンを濟りて只少しくゆかん王なんぞ

この報賞を我に報ゆるに及ばんや 請ふ僕を歸らしめよ我自己の邑にてわが父母の墓の側に死ん但し僕キム

ハムを視たまへかれを王わが主とともに濟り往しめたまへ又爾の目に善と見る所を彼になしたまへ 王いひ

けるはキムハム我とともに濟り往くべし我爾の目に善と見ゆる所をかれに爲ん又爾が望みて我に求むる所は皆

我爾のために爲すべしと 民皆ヨルダンを濟り王渡りし時王バルジライに接吻してこれを祝す彼遂に己の

所に歸れり かくて王ギルガルに進むにキムハムかれとともに進めりユダの民皆王を送れりイスラエルの民の半も亦

しかり 是にイスラエルの人々皆王の所にいたりて王にいひけるは我儕の兄弟なるユダの人々何故に爾を竊み

さり王と其家族およびダビデとともになる其凡の從者を送りてヨルダンを濟りしやと ユダの人々皆イスラエル

の人々に對へていふ王は我に近きが故なり爾なんぞ此事について怒るや我儕王の物を食ひしことあるや王我儕に

賜物を與へたることあるや イスラエルの人ユダの人に對ていひけるは我は王のうちに十の分を有ち亦ダビデ

のうちにも我は爾よりも多を有つなりしかるに爾なんぞ我らを輕じたるやわが王を導きかへらんと言しは我最初

なるにあらずやとされどユダの人々の言はイスラエルの人々の言よりも厲しかりき

第二〇章

爰に一人の邪なる人あり其名をシバといふビクリの子にしてベニヤミン人なり彼喇叭を吹ていひけるは我儕はダビデの中に分なし又エサイの子のうちに産業なしイスラエルよ各人其天幕に歸れよ

是によりてイスラエルの人皆ダビデに隨ふことを止てのほりビクリの子シバにしたがへり然どユダの人々

一王上二・七 耶四一 八母後一九一五
 二母後一九一五
 三母後一九一五
 四母後一九一五
 五母後一九一五
 六母後一九一五
 七母後一九一五
 八母後一九一五
 九母後一九一五
 十母後一九一五
 十一母後一九一五
 十二母後一九一五
 十三母後一九一五
 十四母後一九一五
 十五母後一九一五
 十六母後一九一五
 十七母後一九一五
 十八母後一九一五
 十九母後一九一五
 二十母後一九一五
 二十一母後一九一五
 二十二母後一九一五
 二十三母後一九一五
 二十四母後一九一五
 二十五母後一九一五
 二十六母後一九一五
 二十七母後一九一五
 二十八母後一九一五
 二十九母後一九一五
 三十母後一九一五
 三十一母後一九一五
 三十二母後一九一五
 三十三母後一九一五
 三十四母後一九一五
 三十五母後一九一五
 三十六母後一九一五
 三十七母後一九一五
 三十八母後一九一五
 三十九母後一九一五
 四十母後一九一五
 四十一母後一九一五
 四十二母後一九一五
 四十三母後一九一五
 四十四母後一九一五
 四十五母後一九一五
 四十六母後一九一五
 四十七母後一九一五
 四十八母後一九一五
 四十九母後一九一五
 五十母後一九一五
 五十一母後一九一五
 五十二母後一九一五
 五十三母後一九一五
 五十四母後一九一五
 五十五母後一九一五
 五十六母後一九一五
 五十七母後一九一五
 五十八母後一九一五
 五十九母後一九一五
 六十母後一九一五
 六十一母後一九一五
 六十二母後一九一五
 六十三母後一九一五
 六十四母後一九一五
 六十五母後一九一五
 六十六母後一九一五
 六十七母後一九一五
 六十八母後一九一五
 六十九母後一九一五
 七十母後一九一五
 七十一母後一九一五
 七十二母後一九一五
 七十三母後一九一五
 七十四母後一九一五
 七十五母後一九一五
 七十六母後一九一五
 七十七母後一九一五
 七十八母後一九一五
 七十九母後一九一五
 八十母後一九一五
 八十一母後一九一五
 八十二母後一九一五
 八十三母後一九一五
 八十四母後一九一五
 八十五母後一九一五
 八十六母後一九一五
 八十七母後一九一五
 八十八母後一九一五
 八十九母後一九一五
 九十母後一九一五
 九十一母後一九一五
 九十二母後一九一五
 九十三母後一九一五
 九十四母後一九一五
 九十五母後一九一五
 九十六母後一九一五
 九十七母後一九一五
 九十八母後一九一五
 九十九母後一九一五
 一百母後一九一五

は其王に附てヨルダンよりエルサレムにいたれり

三 ダビデ、エルサレムにある己の家^{いへ}にいたり王其遺^{わうそのこ}して家を守らせたる妾^{めかけ}なる十人の婦^{にん}をとりてこれを一の

室^{いへ}に守り置^{おき}て養^{やしな}へりされどかれらの處^{ところ}には入^いざりき斯^{かく}かれらは死^しる日まで閉^とこめられて生涯^{しやうがい}嫠^{やもめ}婦^めにてすごせり

四 爰^いに王アマサにいひけるは我^{わが}ために三日^{みつか}のうちにユダの人々^{ひとぐ}を召^よきたれしかして爾^{なんぢ}此處^{こゝ}にをれ アマサ

六 乃^{すなは}ちユダを召^よあつめんとて往^ゆたりしが彼^{かれ}ダビデが定^{さだ}めたる期^{とき}よりも長^{なが}く留^{とど}めり 是^{こゝ}においてダビデ、アビシヤ

イにいひけるはビクリの子シバ今^{いま}我^{われ}儕^らにアブサロムよりもおほくの害^{がい}をなさんとす爾^{なんぢ}の主^{しゆ}の臣^{けら}僕^らを率^{ひき}ゐて彼^{かれ}の後^{あと}

七 を追^おへ恐^{おそ}らくは彼^{かれ}堅^{けん}固^こなる城^{まち}邑^ちを獲^えて我^{われ}儕^らの目^めを逃^{のが}れんと 是^{こゝ}によりてヨアブの從^{じふしや}者とケレテ人とペレテ人^{びと}お

八 よび都^{すべ}の勇^{ゆう}士^し彼^{かれ}にしたがひて出^いたり即^{すなは}ち彼^{かれ}等^らエルサレムより出^いてビクリの子シバの後^{あと}を追^おふ 彼^{かれ}等^らがギベオン

九 にある大^{おほ}石^{いし}の傍^{かたはら}に居^をりし時^{とき}アマサかれらにむかひ來^きれり時^{とき}にヨアブ戎^{いくさ}衣^{ころも}に帶^{おび}を結^{しめ}て衣服^{ころも}となし其上^{そのうへ}に刀^{かたな}を鞘^{さや}に

をさめ腰^{こし}に結^{むす}びて帶^{おび}居^をたりしが其^{その}劍^{かたな}脱^だけ墮^おちたり 九 ヨアブ、アマサにわが兄^{あやうだい}弟^{なんぢ}よ爾^{なんぢ}は平^{やす}康^{らか}なるやといひて

一〇 右^{みぎ}の手^てをもてアマサの鬚^{ひげ}を拵^{とら}へて彼^{かれ}に接^{くち}吻^つせんとせしが アマサはヨアブの手^てにある劍^{かたな}に意^いを留^{とめ}ざりければヨア

ブ其^{その}をもてアマサの腹^{はら}を刺^さして其^{その}腸^{はらわた}を地^ちに流^{なが}しだいし重ねて撃^うつに及^{およ}ばざらしめてこれをころせり

二 かくてヨアブと其^{その}兄^{あやうだい}弟^{なんぢ}アビシヤイ、ビクリの子シバの後^{あと}を追^おり 二 時にヨアブの少^{わか}者^{もの}の一人^{ひとり}アマサの側^{そば}に

三 たちていふヨアブを助^{たす}くる者^{もの}とダビデに附^つ従^くものはヨアブの後^{あと}に隨^{したが}へと 二 三 アマサは血^ちに染^そめて大路^{おほぢ}の中^{なか}に轉^まび

居^をたり斯^{この}人民^{ひとたち}の皆^{みな}立^たどまるを見てアマサを大路^{おほぢ}より田^{はたけ}に移^{うつ}したるが其^{その}側^{そば}にいたれる者^{もの}皆^{みな}見^みて立ちとまりければ

衣^{ころも}を其上^{そのうへ}にかけたり 二 三 アマサ大路^{おほぢ}より移^{うつ}されければ人^{ひと}皆^{みな}ヨアブにしたがひ進^{すす}みてビクリの子シバの後^{あと}を追^おふ

一四 彼イスラエルの凡の支派の中を行てアベルとベテマアカに至るに少年皆集りて亦かれにしたがひゆけり

一五 かくて彼等來りて彼をアベル、ベテマアカに圍み城邑にむかひて壘を築けり是は壕の中にたてりかくして

一六 ヨアブとともにある民皆石垣を崩さんとてこれを撃居りしが 一六 一箇の哲き婦城邑より呼はりていふ爾ら聽よ

一七 爾ら聽よ請ふ爾らヨアブに此に近よれ我爾に言んと言へと 一七 かれ其婦にちかよるに婦いひけるは爾はヨアブ

一八 なるやかれ然りといひければ婦彼にいふ婢の言を聽けかれ我聽くといふ 一八 婦即ち語りていひけるは昔人々

一九 誠に語りて人必ずアベルにおいて索問べしといひて事を終ふ 一九 我はイスラエルの中の平和なる忠義なる者なり

しかるに爾はイスラエルの中にて母ともいふべき城邑を滅さんことを求む何ゆゑに爾エホバの産業を呑み盡さん

とするや 二〇 ヨアブ答へていひけるは決めてしからず決めてしからずわれ呑み盡し或は滅ぼさんとするとなし

二 其事しからずエフライムの山地の人ビクリの子名はシバといふ者手を舉て王ダビデに敵せり爾ら只彼一人を

付せ然らば我此邑をさらんと婦ヨアブにいひけるは視よ彼の首級は石垣の上より爾に投いだすべし 二三 かくて婦

其智慧をもて凡の民の所にいたりければかれらビクリの子シバの首級を刎てヨアブの所に投出せり是において

ヨアブ喇叭を吹ならしければ人々散て邑より退きておのおの其天幕に還りぬヨアブはエルサレムにかへりて王の

處にいたれり 二三 ヨアブはイスラエルの全軍の長なりエホヤダの子ベナヤはケレテ人とペレテ人の長なり 二四 アドラムは

徴募長なりアヒルデの子ヨシヤパテは史官なり 二五 シワは書記官なりザドクとアビヤタルは祭司なり 二六 亦

ヤイル人イラはダビデの大臣なり (又)

イ王下一五・二九 代ハ申二〇・一一 ホ傳九・一四、一五 王上 四・四 一六 母後八・一八
下二六・四 二母前二六・一九 母 へ母後八・一六、一八 四・三 又母後二二・三八
口王下一九・三二 後二一・三 ト王上四・六 母後八・一七 王上 四・四 一六 母後八・一八
ル創四一・四五 出二・

ヲ民二七・二一
ワ書九・三、一五、
一六、一七
カ母後二〇・一九
ヨ母前一〇・二四
タ母前一〇・二六、
一・一四
レ母前一八・三、二〇・
八、一五、四二、二三
ツ母前一八・一九
・一八
ソ母後三・七
ネ母後六・一七
ナ母後二一・八、三・七
ラ甲二一・二三

第二二章

一 ダビデの世に年復年と三年饑饉ありければダビデ、エホバに問にエホバ言たまひけるは是はサウルと血を流せる其家のためなり其は彼嘗てギベオン人を殺したればなりと 是において王ギベオン人を召てかれらにいへりギベオン人はイスラエルの子孫にあらずアモリ人の残余なりしがイスラエルの子孫昔彼等に誓をなしたり然るにサウル、イスラエルとユダの子孫に熱心なるよりして彼等を殺さんと求めたり 即ちダビデ、ギベオン人にいひけるは我汝等のために何を爲すべきか我何の賠償を爲さば汝等エホバの産業を祝するや 四 ギベオン人彼にいひけるは我儕はサウルと其家の金銀を取じ又汝は我らのためにイスラエルの中の人ひとり一人をも殺すなかれダビデいひけるは汝等が言ふ所は我汝らのために爲ん 五 彼等王にいひけるは我儕を滅したる人我儕を殲してイスラエルの境の中に居留ざらしめんとて我儕にむかひて 謀を設けし人 六 請ふ其人の子孫七人を我儕に與へよ我儕エホバの選みたるサウルのギベアにて彼等をエホバのまへに懸ん王いふ我與ふべしと 七 されど王サウルの子ヨナタンの子なるメビボセテを惜めり是は彼等のあひだ即ちダビデとサウルの子ヨナタンとの間にエホバを指して爲る誓あるに因り 八 されど王アヤの女リツバがサウルに生し二人の子アルモニとメビボセテおよびサウルの女メラブがメホラ人バルジライの子アデリエルに生し五人の子を取りて 九 さればギベオン人の手に與へければギベオン人かれらを山の上にてエホバの前に懸たり彼等七人俱に斃れて刈穫の初日即ち大麥刈の初時に死り

一〇 アヤの女リツバ麻布を取りて刈穫の初時より其屍上に天より雨ふるまでこれをおのれのために磐の上に布きおきて晝は空の鳥を屍の上に止らしめず夜は野の獸をちかよらしめざりき 二 爰にアヤの女サウルの妾リツ

バの爲しことダビデに聞えければ

二二 ダビデ往てサウルの骨と其子ヨナタンの骨をヤベシギレアデの人々の所より取り是はペリシテ人がサウル

二三 をギルボアに殺してベテシヤンの衢に懸たるをかれらが竊みさりたるものなり 二四 ダビデ其處よりサウルの骨と

二四 其子ヨナタンの骨を携へ上れりまた人々其懸られたる者等の骨を斂たり かくてサウルと其子ヨナタンの骨を

二五 ペニヤミンの地のゼラにて其父キシの墓に葬り都て王の命じたる所を爲り此より後神其地のために祈禱を聽たま

へり

二五 ペリシテ人復イスラエルと戦争を爲すダビデ其臣僕とともに下りてペリシテ人と戦ひけるがダビデ困憊居

二六 りければ 一六 イシビベノブ、ダビデを殺さんと思へり（イシビベノブは巨人の子等の一人にて其槍の銅の重は

二七 三百シケルあり彼新しき劍を帶たり） 一七 しかれどもゼルヤの子アビシヤイ、ダビデを助けて其ペリシテ人を撃

ち殺せり是においてダビデの従者かれに誓ひていひけるは汝は再我儕と共に戦争に出べからず恐らくは爾イス

ラエルの燈光を消さんと

一八 此後再びゴブにおいてペリシテ人と戦あり時にホシヤ人シベカイ巨人の子等の一人なるサフを殺せり

一九 爰に復ゴブにてペリシテ人と戦あり其處にてベテレヘム人ヤレオレギムの子エルハナン、ガテのゴリアテの

二〇 兄弟ラミを殺せり其槍の柄は機の梁の如くなりき 二〇 又ガテに戦ありしが其處に一人の身長き人あり手には各

二一 六の指あり足には各六の指ありて其數合せて二十四なり彼もまた巨人の生る者なり 二二 彼イスラエルを挑みし

二三 かばダビデの兄弟シメアの子ヨナタン彼を殺せり 二三 是らの四人はガテにて巨人の生るものなりしがダビデの手

イ母前三一・二一、一 八番一八・二八 母後 一八・三三 一七
二二・二三 二番七・二六 母後 一七上二一・三六、一 ト代上二〇・四 又代上二〇・六 二五・二六
ロ母前三一・一〇 二四・二五 五・四 詩一三三・一 代上二一・二九 ル母前一七・一〇、 ワ代上二〇・八

カ詩一八・三四・一九 ツ路一・六九
ヨ出一五・一五五・一 本徳一八・一〇
タ申三二・四 詩一八 ナ特九・九、一四・六、
二、三、三、三、七、一 五九・一六、七一・
三、九一・二、一四 七 耶一六・一九
四・二 七 耶一六・一九
レ來二・一三 ヲ詩一六・三
ツ創一五・一 ヲ詩一六・四、一二
ウ出三・七 詩三四・
六、一五、一七
六四・一
ヤ出二〇・二二 王上
八・二二 詩九七・二
マ詩一〇四・三
ケ母後三二・二〇 詩
九七・二
フ母後三二・九
コ士五・二〇 母前二
テ出一五・八 詩一〇
メ母後一五・二六 詩
二〇・七、一〇 詩
二九・三 賽三〇・
八二六
ア詩七四・一
エ申三二・二三 詩七
・三、七七・一七、
一四四・六 哈三・
ユ詩三一・八、一一八
二二・八
母後二二・二五 海
前二六・二三 王上
八・三二 詩七・八

と其臣僕の手に斃れたり

第二章

ダビデ、エホバが己を諸の敵の手とサウルの手より救ひいだしたまへる日に此歌の言をエホバに陳たり曰く
エホバはわが巖わが要害我を救ふ者
わが磐の神なりわれ彼に倚頼むエホバは

わが干わが救の角わが高槽わが逃躲處わが救主なり爾我をすくひて暴き事を免れしめたまふ
我ほめまつる
べきエホバに呼はりてわが敵より救はる
死の波濤われを繞み邪曲なる者の河われをおそれしむ
冥府の繩

われをとりまき死の機檻われにのぞめり
われ艱難のうちにエホバをよびまたわが神に顛れりエホバ其殿より
わが聲をきゝたまひわが喊呼其耳にいりぬ
爰に地震ひ撼き天の基動き震へりそは彼怒りたまへばなり
烟

其鼻より出てのぼり火その口より出て焼きつくしおこれる炭かれより燃いづ
彼天を傾けて下りたまふ黒雲を
の足の下にあり
ケルブに乗て飛び風の翼の上にあらはれ
其周圍に黒暗をおき集まれる水密雲を幕とした

まふ
そのまへの光より炭火燃いづ
エホバ天より雷をくだし最高者聲をいだし
又箭をはなちて彼等を
ちらし電をはなちて彼等をうちやぶりたまへり
エホバの叱咤とその鼻の氣吹の風によりて海の底あらはれい

で地の基あらはになりぬ
エホバ上より手をたれて我をとり洪水の中より我を引あげ
またわが勁き敵およ
び我をにくむ者より我をすくひたまへり
彼等はわが蓄災の日にわれに臨め

りされどエホバわが支柱となり
我を廣き處にひきいだしわれを喜ぶがゆるゑに我をすくひたまへり
エホバ

わが義にしたがひて我に報い吾手の清潔にしたがひて我に酬したまへり 其はわれエホバの道をまもり悪を

なしてわが神に離しことなければなり その律例は皆わがまへにあり其法憲は我これを離れざるなり われ

神にむかひて完全かり又身を守りて悪を避たり 故にエホバわが義にしたがひ其目のまへにわが潔白あるに循

ひてわれに報いたまへり 矜恤者には爾矜恤ある者のごとくし完全人には爾完全者のごとくし 潔白者には

爾潔白もののごとくし邪曲者には爾嚴刻者のごとくしたまふ 難る民は爾これを救たまふ然ど矜高者は爾の目

見て之を卑したまふ エホバ爾はわが燈火なりエホバわが暗をてらしたまふ われ爾によりて軍隊の中を驅

とほりわが神に由て石垣を飛こゆ 神は其道まつたしエホバの言は純粹なし彼は都て己に倚頼む者の干となり

たまふ 夫エホバのほか誰か神たらん我儕の神のほか孰か磐たらん 神はわが強き堅案にてわが道を全うし

わが足を塵の如くなし我をわが崇邱に立しめたまふ 神わが手に戦を教へたまへばわが腕は銅の弓をも

挽を得 爾我に爾の救の干を與へ爾の慈悲われを大ならしめたまふ 爾わが身の下の歩を恢廓しめたま

へば我 蹀ふるへず われわが敵を追て之をほろぼし之を絶すまではかへらず われ彼等を絶し彼等を破碎

ば彼等たちえすわが足の下にたふる 汝 戦のたために力をもて我に帯しめ又われに逆ふ者をわが下に拜跪

しめたまふ 爾わが敵をして我に後を見せしめたまふ我を惡む者はわれ之をほろぼさん 彼等環視せど救ふ

者なしエホバを仰視ど彼等に應たまはず 地の塵の如くわれ彼等をうちくだき又衢間の泥のごとくわれ彼等を

イ詩二四・四 本後二二・二二 賽二・二二、二二、二 一四〇 箴三〇・五 二二・三 詩一〇一 ナ後四・二二

口創一八・一九 詩 へ六五・七 七、五・一五 但四 力母前二・二 賽四五 二一六、一九一 一馬四・三

二創六・九、一七・一 又伯四〇・二一、二二 一四 一四 一四 一四 一四 一四 一四 一四 一四 一四

九 彼の次はアホア人ドドの子エルアザルにして三勇士の中の者なり彼其處に戦はんとて集まれるペリシテ人
 一〇 にむかひて戦を挑みイスラエルの人々の進みのぼれる時にダビデとともに居たりしが たちてペリシテ人を
 撃ち終に其手疲て其手劍に固着て離れざるにいたれり此日エホバ大なる救拯を行ひたまふ民は彼の跡にしたがひ
 ゆきて只褫取而已なりき

二 彼の次はハラリ人アゲの子シヤンマなり一時ペリシテ人一隊となりて集まれり彼處に扁豆の満たる地の處
 三 あり民ペリシテ人のまへより逃たるに 彼其地の中に立て禦ぎペリシテ人を殺せりしかしてエホバ大なる救拯
 を行ひたまふ

一三 刈穫の時に三十人衆の首長なる三人下りてアドラムの洞穴に往てダビデに詣れり時にペリシテ人の隊レバ

一四 イムの谷に陣どれり 其時ダビデは要害に居りペリシテ人の先陣はベテレヘムにあり 一五 ダビデ慕ひていひけ

一六 るは誰かベテレヘムの門にある井の水を我にのましめんかと 一六 三勇士乃ちペリシテ人の陣を衝き過てベテレヘ

ムの門にある井の水を汲取てダビデの許に携へ來れり然どダビデ之をのむことをせずこれをエホバのまへに灌ぎ

一七 て いひけるはエホバよ我決してこれを爲し是は生命をかけて往し人の血なりと彼これを飲ことを好まざりき

三勇士は是等の事を爲り

一八 ゼルヤの子ヨアブの兄弟アビシヤイは三十人衆の首たり彼三百人にむかひて槍を揮ひて殺せり彼其三十人

衆の中に名を得たり 彼は三十人衆の中の最も尊き者にして彼等の長となれり然ども三人衆には及ばざりき

二〇 エホヤダの子カブリエルのベナヤは勇氣あり多くの功績ありし者なり彼モアブの人の獅子の如きもの二人

イ代上二二・二二、二ハ代上二二・一三、ホ母則三三・一
 七・四 一四 へ母後五・一八 七利一七・一〇 九出二五・二五 代上
 口代上二二・二七 二代上二二・二五 ト母前二二・四、五 又番一五・二二

ナ代上一・二三
 ヲ母前二二・一四
 カ母後八・一八、二〇
 ヲ母後二二・一八
 タ代上一・二七
 ツ母後二〇・二六
 レ士二・九
 ソ甲一・二四
 ナ母後二〇・一
 ラ代上一・一
 雅一
 二四
 ・二三、一四
 ム代上二七・二三、
 井耶一七・五
 ウ士二〇・一

二 二を撃殺せり彼は亦雪の時に下りて穴の中にて獅子を撃殺せり 彼また容貌魁偉たるエジプト人を撃殺せり其エ

三 三ジプト人は手に槍を持たるに彼は杖を執て下りエジプト人の手より槍を振とりて其槍をもてこれを殺せり 三三エ

三三 ホヤダの子ベナヤ是等の事を爲し三十勇士の中に名を得たり 彼は三十人衆の中に尊かりしかども三人衆には

及ばざりきダビデかれを参議の中に列しむ

二四 三十人衆の中にはヨアブの兄弟アサヘル、ベテレヘムのドドの子エルハナン ハロデ人シヤンマ、ハロ

二六 デ人エリカ バルデ人ヘレヅ、テコア人イツケシの子イラ アネトテ人アビエゼル、ホシヤ人メブンナイ

二八 アホア人ザルモン、ネトバ人マハラライ ネットバ人バアナの子ヘレヅ、ベニヤミンの子孫のギベアより出た

三〇 るリバイの子イツタイ ヒラトン人ベナヤ、ガアシの谷のヒダイ アルバテ人アビアルボン、バホルム人ア

三三 ズマウテ シヤルボニ人エリヤバ、キゾニ人ヤセン ハラリ人シヤンマの子ヨナタン、アラリ人シヤラルの

三四 子アヒアム ウルの子エリパレテ、マアカ人へベル、ギロ人アヒトベルの子エリアム カルメル人へヅライ、

三六 アルバ人パアライ ゾバのナタンの子イガル、ガド人バニ アンモニ人ゼレク、ゼルヤの子ヨアブの武器を

三九 執る者ベエロデ人ナハラライ エテリ人イラ、エテリ人ガレブ ヘテ人ウリヤあり都三十七人

第二章

一 エホバ復イスラエルにむかひて怒を發しダビデを感動して彼等に敵對しめ往てイスラエルとユダ

二 を數へよと言しめたまふ 王乃ちヨアブおよびヨアブとともにある軍長等にいひけるは請ふイ

三 スラエルの諸の支派の中をダンよりベエルシバに至るまで行めぐりて民を核べ我をして民の數を知しめよ

アブ王にいひけるは幾何あるともねがはくは汝の神エホバ民を百倍に増たまへ而して王わが主の目それを視るに

四 いたれ然りといへども王わが主の此事を悦びたまふは何故ぞやと 四 されど王の言ヨアブと軍長等に勝ければ

五 ヨアブと軍長等王の前を退きてイスラエルの民を核べに往り 五 かれらヨルダンを濟りアロエルより即ち河の

六 中の邑より始めてガドにいたりヤゼルにいたり 六 ギレアデにいたりタテムホデシの地にいたり又ダニヤンにい

七 たりてシドンに旋り 七 またツロの城にいたりヒビ人とカナン人の諸の邑にいたりユダの南に出てベエルシバに

八 いたれり 八 彼等国を徧く行めぐり九月と廿日を経てエルサレムに至りぬ 九 ヨアブ人口の數を王に告たり即ち

九 イスラエルに劍を抜く壯士八十萬ありき又ユダの人は五十萬ありき

一〇 ダビデ民の數を書し後其心自ら責む是においてダビデ、エホバにいふ我これを爲して大に罪を犯したり

二 ねがはくはエホバよ僕の罪を除きたまへ我甚だ愚なる事を爲りと 二 ダビデ朝興し時エホバの言ダビデの先見者

三 なる預言者ガデに臨みて曰く 三 往てダビデに言へエホバ斯いふ我汝に三を示す汝其一を擇べ我其を汝に爲ん

三 と 三 ガデ、ダビデの許にいたりこれに告てこれにいひけるは汝の地に七年の饑饉いたらんか或は汝敵に追れて

四 三月其前に遁んか或は爾の地に三日の疫病あらんか爾考へてわが如何なる答を我を遣はせし者に爲べきかを

四 決めよ 四 ダビデ、ガデにいひけるは我大に苦しむ請ふ我儕をしてエホバの手に陥らしめよ其憐憫大なればなり

五 我をして人の手に陥らしむるなかれ 五 是においてエホバ朝より集會の時まで疫病をイスラエルに降したまふダンよりベエルシバまでに民の死る

六 者七萬人なり 六 天の使其手をエルサレムに伸てこれを滅さんとしたりしがエホバ此害惡を悔て民を滅す天使に

イ申二・三六 番一三 二番一九・二八 士 七母前二二・一三 一四 二二 二二・一三

九、一六 一八・二八 代上 一四、一九・一五 七二、二四 一四

口民三二・一、三 六代上二二・五 二九・二九 六 三二・二三 代上 二二・一五

ハ番一九・四七 士 へ母前二四・五 又母前二二・五 一五 二二・一五 夕創六・六 母前一五

レ代上三二・一五 母 ヲ代上三二・一七 ナ民一六・四八、五〇 ウ代上三二・二四、ノ母後二四・二二
後二四・一八 代下 ヲ代上三二・一八 ラ王上一九・二二 二五
三・一 木創二三・八一、一六 ム結二〇・四〇、四一 井母後二二・二四

七 いひたまひけるは足り今汝の手を住めよと時にエホバの使はエブス人アラウナの禾場の傍にあり 一七 ダビデ民を撃つ天使を見し時エホバに申していひけるは嗚呼我は罪を犯したり我は悪き事を爲たり然ども是等の羊群は何を爲たるや請ふ爾の手を我とわが父の家に對たまへと 一七

八 此日ガデ、ダビデの所にいたりてかれにいひけるは上りてエブス人アラウナの禾場にてエホバに壇を建よ 一八

一九 一八のひ ダビデ、ガデの言に隨ひエホバの命じたまひしごとくのほれり 一九 アラウナ觀望て王と其臣僕の己の方に進 二〇

二〇 二 一八のひ 此日ガデ、ダビデの所にいたりてかれにいひけるは上りてエブス人アラウナの禾場にてエホバに壇を建よ 二〇

二一 三 一八のひ 此日ガデ、ダビデの所にいたりてかれにいひけるは上りてエブス人アラウナの禾場にてエホバに壇を建よ 二一

二二 四 一八のひ 此日ガデ、ダビデの所にいたりてかれにいひけるは上りてエブス人アラウナの禾場にてエホバに壇を建よ 二二

二三 五 一八のひ 此日ガデ、ダビデの所にいたりてかれにいひけるは上りてエブス人アラウナの禾場にてエホバに壇を建よ 二三

二四 六 一八のひ 此日ガデ、ダビデの所にいたりてかれにいひけるは上りてエブス人アラウナの禾場にてエホバに壇を建よ 二四

二五 七 一八のひ 此日ガデ、ダビデの所にいたりてかれにいひけるは上りてエブス人アラウナの禾場にてエホバに壇を建よ 二五

六に壇を築き燔祭と酬恩祭を獻げたり是においてエホバ其地のために祈禱を聽たまひて災のイスラエルに降ること止りぬ 二六

サムエル後書 をはり